

伊能忠敬

研究

史料と伊能図

二〇一五年 第七十五号

特集 北海道図と間宮林蔵

矢越岬

吉岡川

吉岡漁港

空撮：20140920 中塚

伊能忠敬研究会

THE INOH TADATAKA JOURNAL
STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.75 2015

表紙解説

伊能忠敬蝦夷地上陸地点吉岡の空撮

(中塚建設株式会社提供)

伊能忠敬の蝦夷地測量では、実施がきまつてからも色々と曲折があった。

Q…来年にはどうか。A…準備をはじめてしまいました。Q…海路ではどうか。A…船に弱いので御勘弁を。Q…荷物が多すぎる。A…多い部分は自弁する。Q…手当ては少ないかもしれないが。A…当てにしないから通行だけ保証してくれば全額自弁でも構わない。など事務的なやりとりで時間を費やし、一行六名が出発できたのは、寛政十二年閏四月十九日。陽暦に直すと六月十一日だった。

蝦夷地の根室まで千六百kmをあるいて往復し、年内に地図を作って差し出せという命令だったから出発がとにかく遅すぎた。師匠の高橋の指示を仰ぎ、奥州街道は歩測、蝦夷地は縄を張るときめる。日数を稼げる場所は奥州街道しかないのです、急ぎに急いで北上した。奥州街道の進行速度は一日四〇kmだった。



福島町吉岡付近 (国土地理院ウオッチ図)

昔の旅人は早出、早着きで一日十里(四〇km)が標準だったというが、伊能隊は測量器具・製図・生活用品を積んだ馬を連れ、方位と距離を当たりながらの進行であるから超人的だ。夜明けから夕刻まで十時間働いている。たどりついた三厩港から箱館へ津軽藩の役船に乗る予定であったが、風向きが悪くて船が出なかった。風待ちを九泊して奥州街道で稼いだ日数をふきとばしてしまう。十日目、船頭が気の毒がつて無理して船を出してくれたが、風が止まってしまう。やむを得ず吉岡(今は福島町)という場所に船をつけてくれた。

船中で一晚風待ちしたが、見込みがないので、箱館まで二日間かけて歩くことになる。吉岡は伊能測量難航の地の一つである。

しかしながら、伊能隊が第一次測量で蝦夷地に第一歩を踏み出した場所に間違いはない。この後も問題が続出するのだが、気が遠くなるような遠か彼方の別海町まで、ひるまずに前進し、(箱館で一人脱落者がだが)全員無事帰着した勇氣と団結心に敬意を表したい。

いま青函トンネルが上がつている場所で、伊能ウオークも訪問しました。簡単な記念柱が立てられています。どんな場所か空から見たことはなかったが、地元の会員中塚さんから空からの写真を提供されたので、表紙を飾ることにしました。

この写真はラジコンにカメラを載せて遠隔制御で撮ったのだそうです。ここが基点となって北海道の伊能の足跡をめぐるヨットやモーターボートなどが集まる根拠地になればいいな、と考えています。

撮影 中塚徹朗 文 渡辺一郎

目次 75号

特集 北海道図と間宮林蔵 グラビア

●伊能忠敬の第一次測量北海道図と

最終伊能図(間宮図)の比較

渡辺 一郎・横溝 高一

1

研究と話題

●「間宮林蔵の東蝦夷地測量」執筆について

井口 利夫

20

●間宮林蔵の実地測量

―千島・カラフト島・蝦夷地―

高木崇世 芝

24

●間宮林蔵の蝦夷地測量成果を比較

打田 元輝

30

●間宮林蔵 道南測量の足跡

中塚 徹朗

38

●間宮林蔵 釧路・厚岸を通る記録

打田 元輝

41

謝辞

渡辺 一郎

42

●コラム 国立公文書館の奇遇

星埜 由尚

43

●伊能忠敬の蝦夷図についての疑問

星埜 由尚

43

忠敬談話室

●伊能忠敬相浦地区測量二百年記念文碑

設立の意義とその経緯 平川 定美

47

●伊能忠敬旧宅大修復なる

コラム 内弟子門谷清次郎は絵師だった

伊能 洋

52

●各地の記念碑・標柱等紹介(四)

河崎 倫代

54

●ニュース・会員便り・お知らせ

大河ドラマ化でNHK陳情・香取支部ニュース

会員だより

齊藤サダ・市川美津夫

新入会員紹介・二〇一五年度総会予告ほか

60

58

57

特集

伊能忠敬の北海道図は間宮林蔵の測量だった

一、伊能忠敬の第一次測量北海道図と

最終伊能図（間宮図）の比較

渡辺一郎・横溝高一

まえがき

きっかけ

伊能蝦夷図はすべて間宮が測り直したのではないか、という意見は大分前からあったが、たまたまキツカケがあつて、伊能第一次測量図と最終本伊能図（間宮図）を重ね合わせてみたところ、細部まで違いがあることが分かった。資料を揃えて新聞発表した。

新聞、放送の皆さんにとっては意外な結論だったので、NHK、読売、朝日、日経、産経、北海道新聞などが大きく取り上げ、他の地方紙でも話題となったので経緯の詳細を報告する。

地図関係については、なるべく本文中で説明する。

国立公文書館デジタルアーカイブで印刷に耐える詳細な画像がダウンロードできると分かったのは、2013年5月頃フロア展中央委員会から指宿フロア展向けの「天保国絵図琉球国（奄美大島）を大図と同じ1:50,000の縮尺で観賞に耐え得る品質で印刷してほしい」と委託されたことに始まる。精細な情報公開と利用に関する制限なし、という公開条件が検討のキツカケと思われる。

その後、「伊能図大全」の編集作業のため公文書館所蔵の第一次測量図の収集と画像編集作業は中断し、再開したのは2014年2月からだった。

伊能第一次測量大図は、国立公文書館では

「松前距蝦夷行程測量分図（まつまええぞへいたるこつていそくりようぶんず）」と呼ばれ、一〇枚一セットで公開されている。

東京国立博物館でも同じ図が所蔵されているが名称は「蝦夷地実測図」となっており、国立公文書館に無い津軽海峡部分があるが蝦夷部分は、途中数枚紛失しており、国立公文書館ほど揃っていない。また、引用が自由でなく、新聞発表など難しいので、検討対象からはずした。

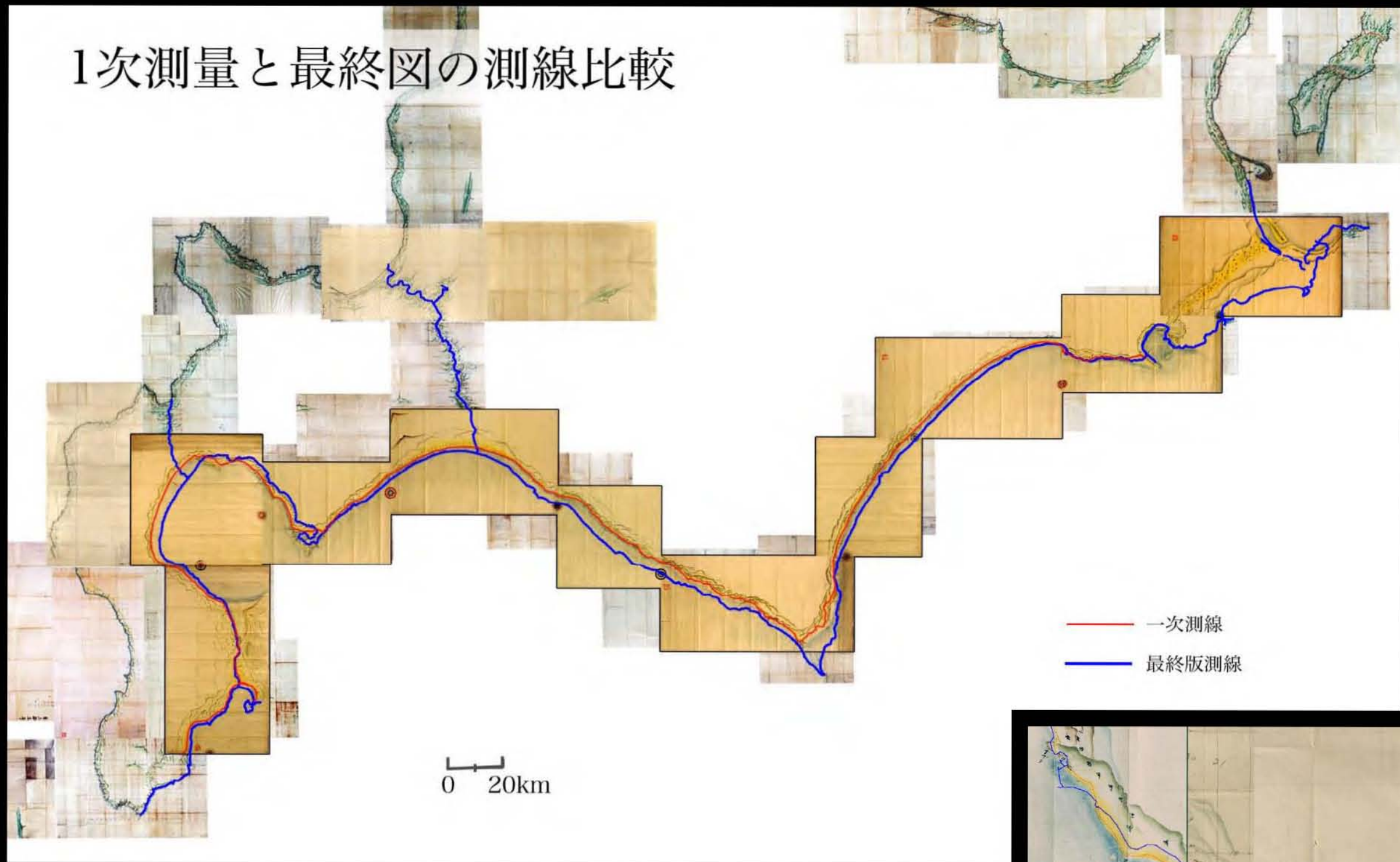
北海道伊能図については、定説では伊能忠敬が行った北海道東南海岸測量の成果に、間宮がその他部分を補足して、完成されたとされている。しかし、その根拠は厳密に両図を比較したものではなく（これまで、そういう報告

は見当たらない）、奥地実測録にある「蝦夷地部分は間宮林蔵の測るところにより参補（注1）した」という記述によつたものである。

第一図は室蘭地区の両図の比較である。2005年に伊能忠敬研究会員 井口 利夫氏が伊能研究会報四一号において、この室蘭図を具体例にあげて「最終版伊能図の北海道図はすべて間宮林蔵測量によるものだったのではないか」と指摘されている。定説を覆す意見で、今回の調査と記者発表の先行報告である。

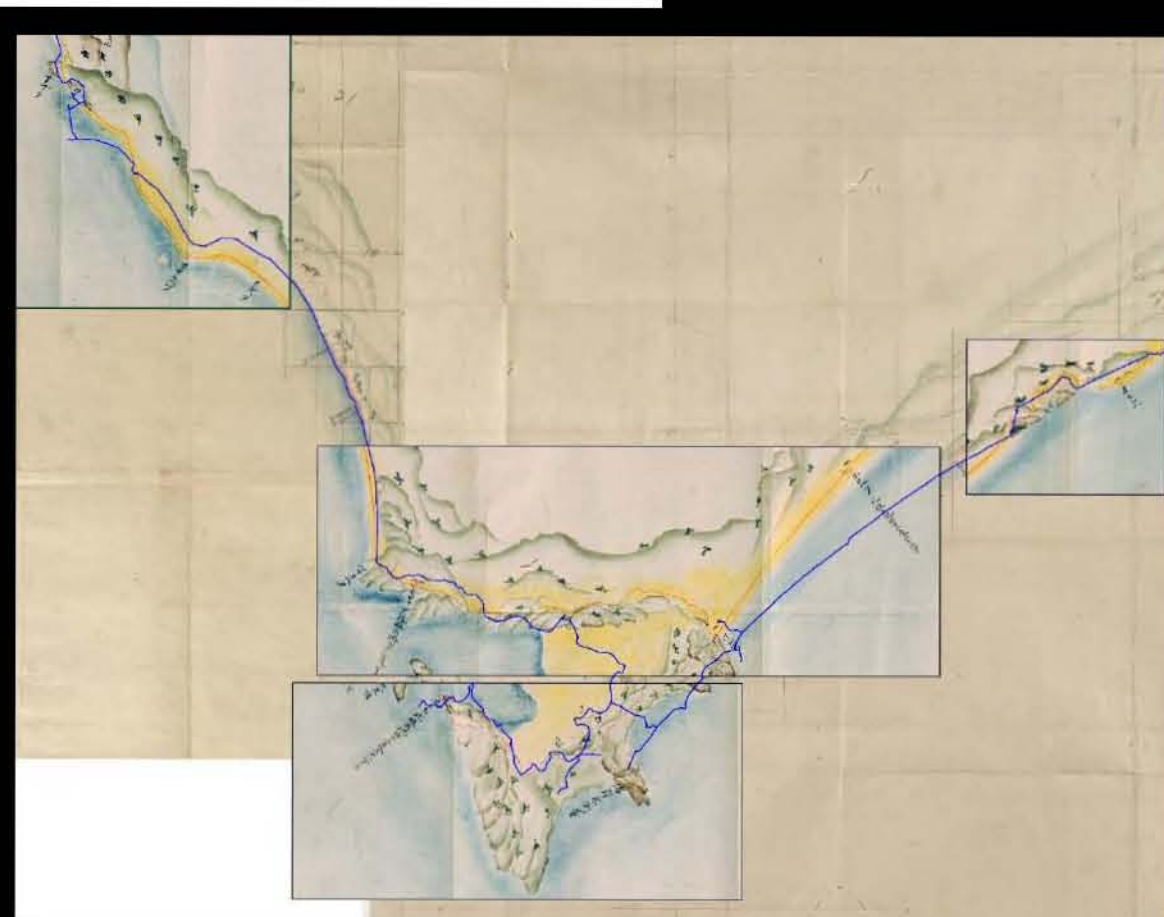
注1 参補という言葉は諸橋「漢和大辞典」になく、国語大辞典にも出てこないの、正確な意味はわからないが、参照、補充くらいの意味ではなからうか。明治以来の伊能忠敬研究で測量データあるいは地図面を比較したことはなさそうである。

1次測量と最終図の測線比較



第一図 ↓ 第二図 ↑
 第一次測量大図の縮尺は、星学手簡にある高橋至時の書状によると200歩を一分に表現したという。縮尺に直すと四三、六三六分の一であるとのこと。縮尺をまず確認した。精密には測れないが、各図で現在も特定出来る二地点間を計測し平均を取ったところ 1/44,521 となり定説通りほぼ合致していることがわかった。

注2 「測量日記第三巻の末尾にある第一次測量図の凡例中に、曲尺二寸九分七厘を一里とした」とある。一里=36町、一町=60間、一間=6尺、一尺=10寸、一寸=10分、一分=10厘、従って、一里=12,960,000厘、2寸9分7厘=297厘、297/12,960,000 約 1/43636.36 となる。



注3

星学手簡(せいがくしゅかん)で高橋至時(たかはしよしとき)が間重富(はざましげとみ)に報じている「200歩を一町とし、一町を一分に表現した」という言葉によると、忠敬の歩幅は66.1cmとなる。佐久間達夫氏は雑録の記事から計算して69cmとしているが、その差は5%以下である。このくらいの差は仕方ないだろう。

1分 ≒ 0.303cm
 $43,636 \times 0.303 \div 200 \approx 66.1$

各図の重ね合わせ

蝦夷東南海岸の国立公文書館大図全部を接続した海岸線と、最終本伊能大図の海岸線を比較した結果は、見開きの第二図(上図)のとおりである。

全測線について、方向性のない食い違いが生じている。どこかを修正すれば両測線が重なるという関係にないので大変迷ってしまった。

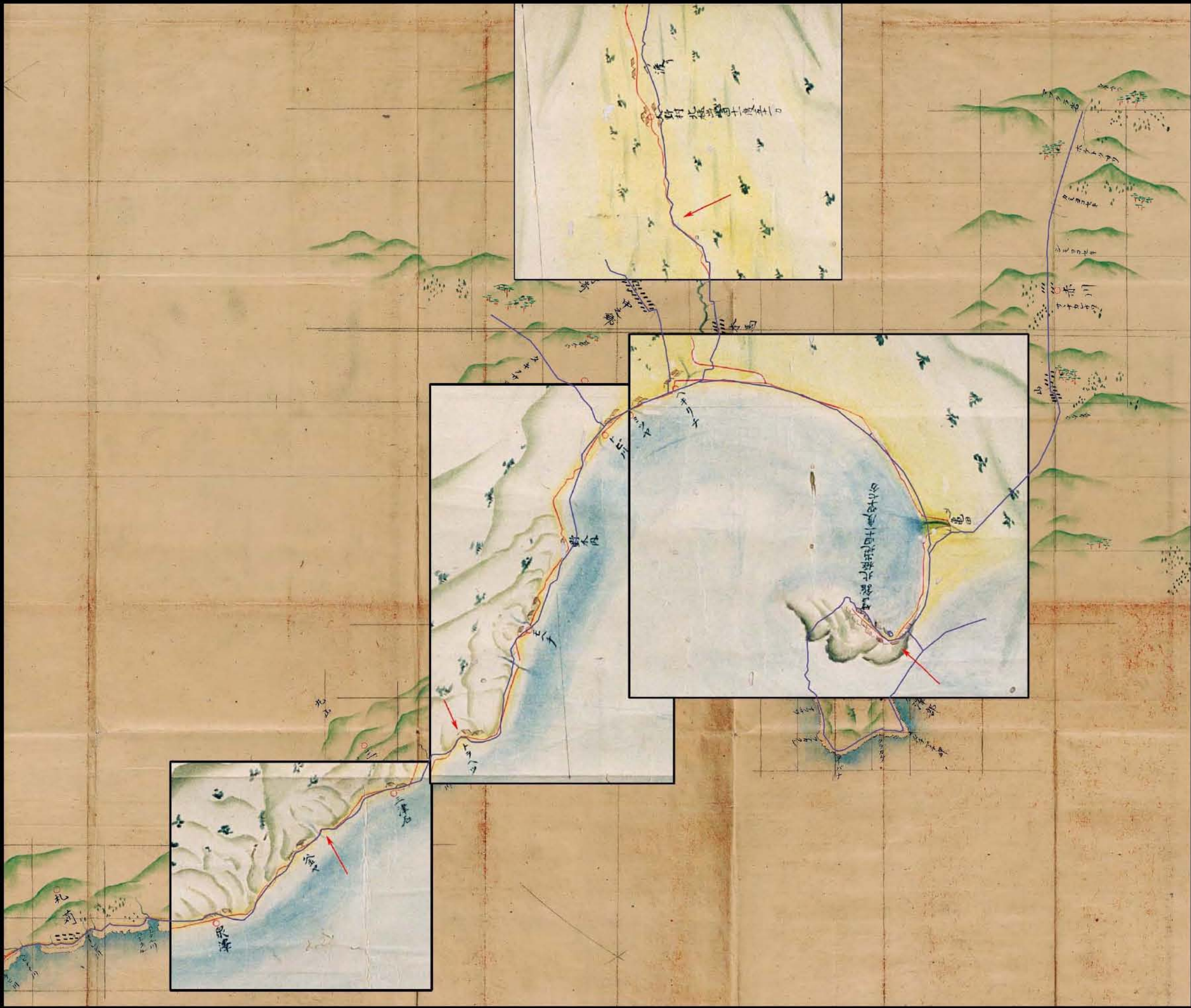
念のため、現在の国土地理院の地図と最終大図接続図を比較してみたが、よく重なっていることが分かる。最終伊能図と第一次測量図の食い違いは何故か。

伊能、間宮が測量している時期に、沿海測量をおこなった第三の人物はいないので、最終本の測線は間宮が測り直したと考えるしかないことになる。食い違いの程度を眺めるために、国立公文書館大図(以下一次図という)のなかで、各図から部分的に、違いの大きな部分、小さな部分などを拾い出して較べてみた。

第三図 函館近辺

はじめ、最終本（アメリカ大図 8号）の対応する二地点が重なるように、一次図を拡大するだけで簡単に重なると思っていた。一次図と最終本が同じ伊能のデータで作図されていたと思っていたからである。それが意外に手間取ってしまった。違いを認めて部分を切り出して大体を合わせることにしてまとめたのが第三図である。かなりの時間を費やした。一次図の縮尺は同じなので、各図の↓の部分の起点として、50%の透過図を作りこれを最終本と重ね合わせ、重ねた後は非透過に戻している。他のメンバーも同じ作業を行っていたが、重なるのが困難との連絡があった。強調している赤が第一次の測線、青が最終図の測線である。第一次測量では函館半島の南側（大鼻岬、立待岬）は測量されていないが、これを間宮が測ったと考えるのには異論はないだろう。

ただ泉沢、三石間、あるいはモヘジ付近、函館手前の長い海岸線など第一次図を使ってもよいと思われる部分も最終図の測線は取って違えているのは、間宮は測り直したと考える一つの理由でもある。別の立場から考えてみよう。不測量と一次図にかかれており、最終図で補充されている襟裳岬の測量はどのようにおこなわれたであろうか。ヘリコプターは無いのだから、間宮は襟裳へ着くためには、徒歩か馬か船しか方法はない。どのみち、途中で縄を引き、方位を測りながら進んでも労力の差はそう大きくはならないだろう。間宮はエトロフあたりでも測量をしていたというから、伊能から引き継いだ時点でやり直しを考えていたと推測してもそうおかしくはなさそうである。※



※一方、伊能の測量日記をみると、距離の記述があいまいである。データを書いた野帖とは別かも知れないが、里単位でしか書いてないところがある。そして第二次測量の願書では第一次測量は自信がない、としている。

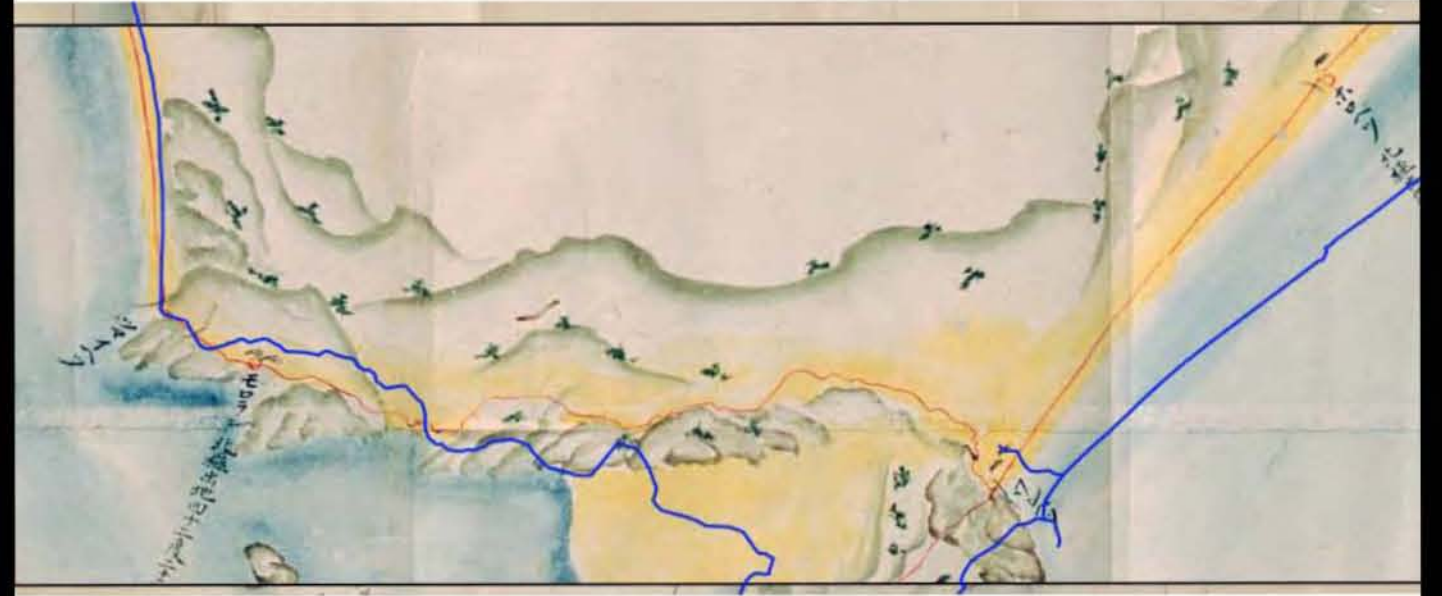
第一次九州測量から帰って、間宮に委嘱した時点では、伊能側の北海道図についての自己評価はその後の実績と対比すると、大変厳しかったような気がしてならない。

第四図 大沼・小沼、森近辺
森町の海岸部分を基準にしたこともあるが、大沼・小沼付近のズレは大きい。大沼・小沼付近だけ重ねようとしたが、上手く重ねられなかった。

しかし、モリ村以北は、一次図をそのまま使ってもいいと思うのだが、違いを出している。



松前図を重ねた図



アメリカ大図 29,30



第五図 室蘭近辺

このエリアも重ねるのがなかなか困難であった。最終図は29号、30号を接続している。

すでに研究会報四一号(2005)で井口利夫氏が例にされた部分を含んでいる。当時は図でしめされたがモノクロで分かり難い面がある。特に室蘭市街の海岸は広く埋め立てられており、現在図と重ねるとインターネットでは見づらい。しかし一次図と最終図の測線はほとんど重ならないことが分かる。

第六図 長万部近辺

今回の九図中で、このエリアがもともと重ならなかった。唯一位置の特定ができたのが、シツカリ川部分だったが、このような重なりになった。

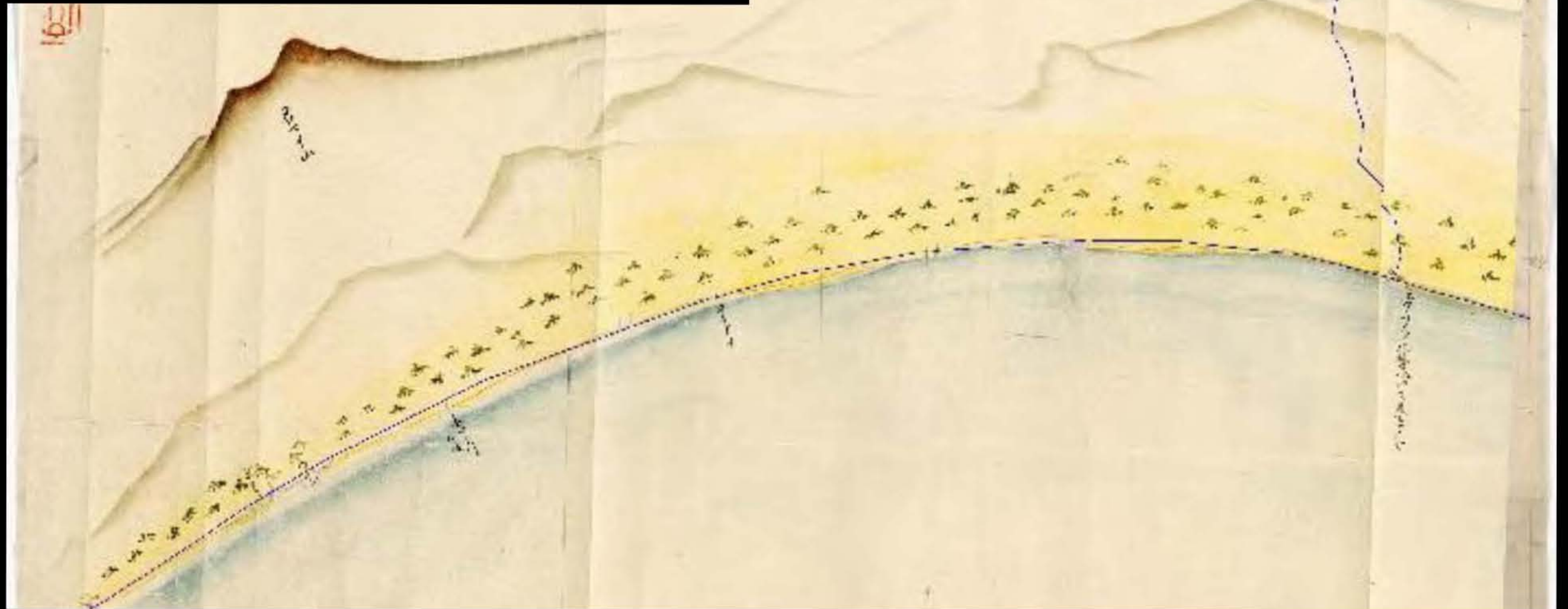
長万部では、恒星測量をおこなっているの、ポイントと思われたが、図を見て分かる通り、一次図では桁形の測線になっている。

第七図A 苫小牧近辺

ユウフツとシラライの二地点を基準とし、一次図を少々縮小、時計回りに回転して重ねた。このエリアがもつとも良く重なった部分である。拡大図を見ても分かるように、それでも測線がズレている。ユウフツ（勇払）では恒星測量が行われ、最終本では石狩平野を通る横切り線（日本海と繋ぐ測線）が画かれた。

第七図B 日高三石近辺

ミツイシ付近を基点として重ねた。このエリアもよく重なっているが違ふという例である。

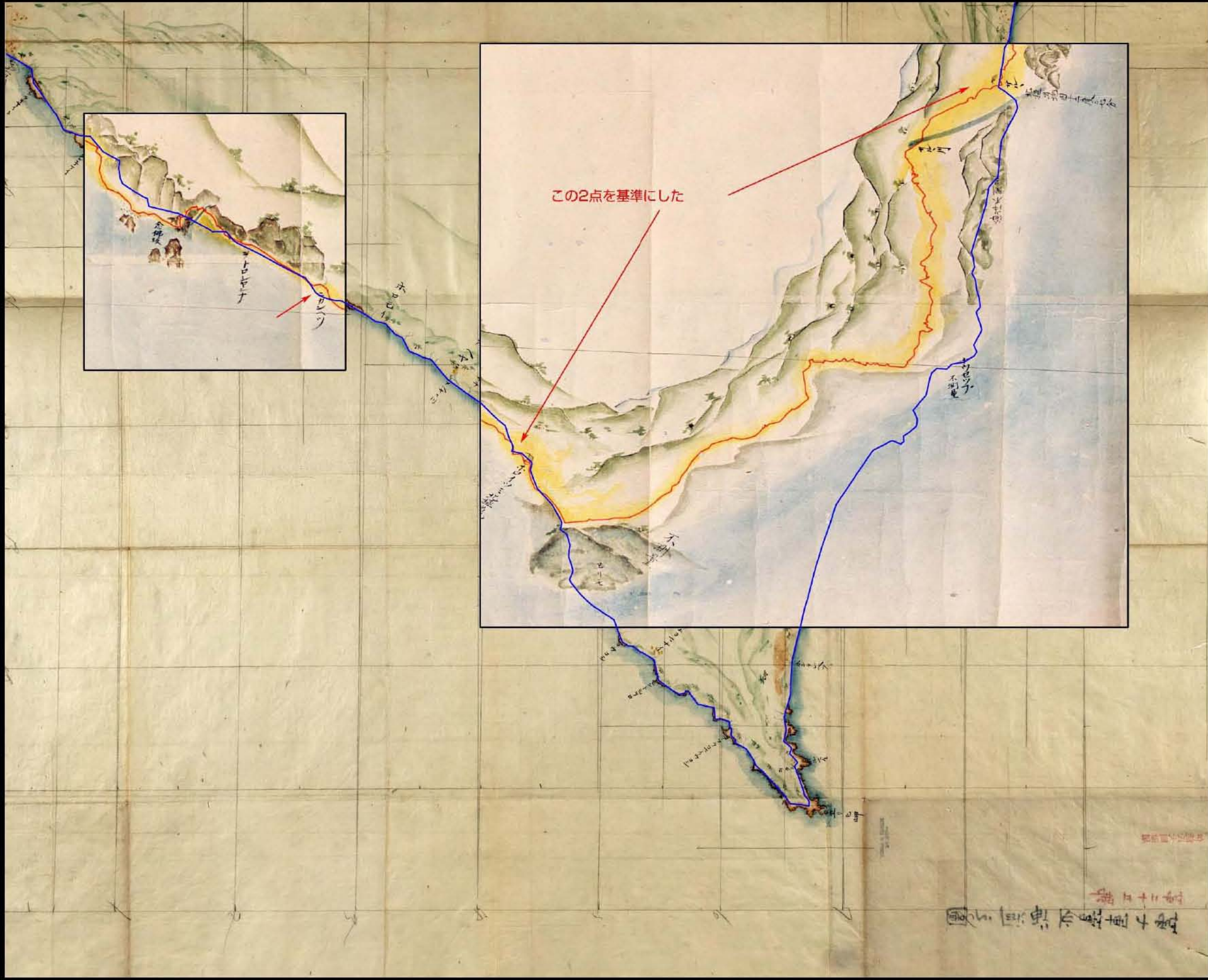


第八図 襟裳岬近辺

襟裳岬付近は不測量で、大きな違いは古くから知られていた。予想どおり大幅な違いがある。念仏坂付近はニカンヘツ川を基準に重ねている。ほとんど重ならない。

一次図では、測量日記で「地獄で仏にあった気持ち」と弱音を吐いた場所の近くに念仏坂が描かれている。念仏坂が描かれたのは一次図だけであるが、地勢は日記の表現と合っている。

襟裳岬側はホロイツミ（最終図はホロイツ）とサルノを基準に重ねた。（図上の矢印）



第九図 十勝川河口近辺

最終図の23号と24号を接続し、23号部分のシヤクベツ川、24号のオオツナイに合うように一次図を縮小し、回転した。シヤクベツ川からオコッペまでは、ほぼ一致しているが、だんだんずれて行く。

第一〇図 厚岸近辺

第一次測量はセンホラチ（最終図はホンセンホウシ）まで行われた。忠敬の到達地は、ここからオホーツク海岸のニシベツ（実はベツカイ）である。

厚岸湾は測量をしていないが、目視だけでよく地形が画かれている。図中の黒線は最終図に画かれている海岸線を示す。



第二図 国土地理院地図に重ね合わせ図



第一次図と最終図についての参考事項

伊能北海道図は間宮の測量か、伊能第一次図に補足したものかを論ずるとき、検討テーマは次の五項目かと考える。

- 一、なぜ伊能は間宮に北海道図の完成を委嘱したのか。
- 二、その時期はいつか。
- 三、測量データを受け取った時期
- 四、完成した地図はどれか
- 五、間宮による伊能蝦夷図と間宮蝦夷図との関係

間宮への委嘱の事実、奥地実測録に参補という意味不明な言葉で記されているが、理由、経緯の明確な記録はない。二、三についても間宮、伊能間の交流を推測させる時間的

経過の記録があるだけである。

思うに、大日本沿海輿地全図の完成が視野に入った九州測量中のある時期に、忠敬は、蝦夷図が未完成で、しかも実測部分の蝦夷東南図にも自信がなかった（測量日記第二巻）ことが気になったのではないか。当時は一若者に過ぎなかった間宮林蔵が樺太探検で、その根性を示したこと、蝦夷図完成を林蔵に委嘱する気になったのではないか。

九州第一次測量から帰着し、再度幕命で屋久島種子島その他を目的に九州に出かけるまでの、わずかの時間を利用して間宮を呼び出して、話し合っただけと思われる。

忠敬も間宮も個性豊かで、行動力に富んだ人物であるが、忠敬の想いを聞いた間宮はその気になって引きうけ、間宮による伊能蝦夷図が制作されることになったのであろう。

伊能・間宮間の交流は短期間に八回に及ぶが、（忠敬の江戸日記）記録には協議の内容とかが目的が書いてないので、間宮による測り直しまで合意されたかどうかは分からない。

一方、間宮が蝦夷地測量のデータを持参したと思われる文化十四年十一月から、伊能宅に約二ヶ月滞在したことは事実である（忠敬の江戸日記）。

忠敬は翌年四月十三日に没しているが、文化十四年中は病床にあったが、元気で、仕事の指示をしていたという（箱田良助が郷里にあてた書簡）。



この二ヶ月間、仕事の鬼のような二人が茶飲み話だけをしていたとは思われない。蝦夷地測量データの引継ぎのほかに、彼の地の測量上の苦労点、方法論などを忠敬は詳しく聴きとったのではない。その上で、蝦夷地南岸も含め、間宮データの全面採用を指示したものと推測する。

現実のデータは食い違っているのであるから、機械的に置換したと考えられなくもないが、何しろ大御所の忠敬が創業時代に実測した部分である。追加部分はいとしても、下役や内弟子の判断では置き換えは出来なかったとも思う。

間宮が何か書き残して呉れたら良かったのに、とつくづく思っているが、乏しい資料のなかで残っているものに、国立公文書館蔵の「蝦夷全図」と「北海道実測図」がある。

蝦夷全図は報道発表で紹介したが、伊能蝦夷図の小図だった。経緯線、方位線がないが地名の掲載数は東博の小図とほぼ等しく、針穴も残っているものだった。

訂正箇所など結構あったので、稿本としたがこれまで、知られていない珍しい伊能図である。針穴があるので、作図は伊能チームによりおこなわれたことは間違いないが、間宮データで伊能チームが制作したとすると、当然第一次との比較は最初から問題になったろう。やはり生前に結論が出ていたと考えたい。もう一方の北海道実測図の方は、間宮制作の蝦夷図の写本であるが、海岸線だけでな

く、内陸部も河川の流域を中心にまとめられており、対象は五百河川に及ぶという（高木氏談）。

この図は間宮蝦夷図ともいうべき地図で、伊能測量以前から作り始められ、完成は文政末年という。本稿でも、どなたかが解説される予定であるが、良くぞここまで、と思わせる精細なものである。

ところが、同一人が同時期に作った地図ならば、海岸線はピツタリと合わなければならぬが、必ずしもそうではない。なぜだろうか。納得できるような説明は難しい。

目下のところ、「間宮は伊能に依頼されたとき、ある程度の独自の地図データは持っていた。しかし、伊能に依頼されたので、伊能方式による測量をおこなった。」

伊能へ引き渡したのち、自分データによる地図を制作完成したのではなからうか。この図の完成時期は、伊能図の提出より遙か後年だったという。

我々は検証にあたつて、最終本伊能図としてアメリカ大図接続図を利用したのであるが、伊能忠敬の最終版の確認には、本来なら伊能忠敬記念館の大図下図を撮影し比較しなければならぬが、その段階には進めなかった。また、伊能小図の発見を発表するには、本来なら写真を提供しなければならぬが、大型地図の撮影が出来なかったため、公文書館にお願いして、会議室をお借りして事前撮影をおこなった。

公文書館、報道機関に御協力いただき、新聞と放送で時間帯を分けて撮影した。

NHKの撮影中、測線に裏から光をあてて、針穴を撮影することが出来た。残念ながら放送時間が少なくて、針穴確認の部分は紹介できなかったが、撮影されているので、いつかNHKから放送されると期待している。

今回の発表は、久しぶりの大型ニュースとなり、各社とも大変熱心に、丁寧に取り組んでいただいた。厚く御礼を申し上げます。



報道機関発表風景



「間宮林蔵の東蝦夷地測量」執筆について

井口利夫

はじめに

本誌四一号に掲載された拙文「間宮林蔵の東蝦夷地測量―文政上呈図にその足跡を探す―」について、本会名誉代表渡辺一郎氏から投稿の経緯を紹介するようにお勧めがあった。

九年前（2005年）の旧聞に属することで躊躇するところもあったが、これから伊能図を研究する方々に参考になることもあろうから、との氏のお考えもあって、誌面を汚すこととした。

（注）江戸時代には北海道の南岸・太平洋側一帯を東蝦夷地、日本海・オホーツク海側一帯を西蝦夷地と呼んだ）

1 本誌へ投稿するまで

（1）東博伊能図展で初見の驚き

それは平成十五（2003）年十一月のこと、もう十一年も前のことになる。上京中、偶然に東京国立博物館（以下、東博）で『伊能忠敬と日本図』展が開催中なのを知って、予定を変更して出掛けた。極彩色の豪華な九州地方の大図や、各地の珍しい絵図類の中に、地味な淡彩色の折図『蝦夷地図（大図）』以下、東博図）8舗（日高地方は欠図）が展示されていた。寛政十二年の伊能忠敬測量の大図の写しだったので驚いた。道東の方からずっと見てきて、室蘭付近の図で釘付けになった。

文政上呈図（中図）については、地名や旧道の調査等で何度も詳しく見ていたので、概要は頭に入っている。しかし、それとは山地の描写が全く異なるだけでなく、測線を示す朱線の位置もどうも違う。文政上呈図の測線は、海岸線近くを通つ



「寛政大図」の室蘭部分 国立公文書館所蔵
（「松前距蝦夷行程実測分図3」部分）

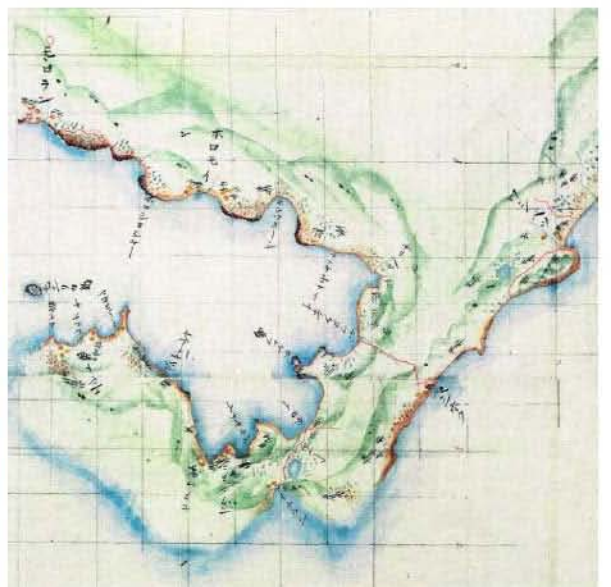
ていたはずだが（大図は明らかに海岸線に沿っているが、当時は東蝦夷地部分は中図しか見つかっていなかった、本図の測線は内陸を通っている。どうやら、測線は当時のモロラン道とエトモ道を通っているように見え、明らかに文政上呈図の測線とは異なる。：ということ、文政上呈図の室蘭部分は間宮林蔵の測量によるのではないか！

当時（今も）の「定説」では、蝦夷地の伊能図は寛政十二年の伊能忠敬の東蝦夷地測量成果と間宮林蔵の西蝦夷地の測量成果を合わせて完成した、伊能・間宮の合作、ということになっていた。

図録を買い求め、拡大コピーを作ってホテルで繰り返し眺めた。その他にも記憶にある文政上呈図との相違があるようだ。これは一大事・・・翌日も予定を変更して東博へ出かけた。

この時の展示は高橋景保の『元蝦夷地図』や今井八九郎のみことな絵図類（現在は重文）など、興味深い絵図も多数出展されていたのだが、それらを吹き飛ばすような衝撃だった。

（2）寛政・文政伊能図を調べる



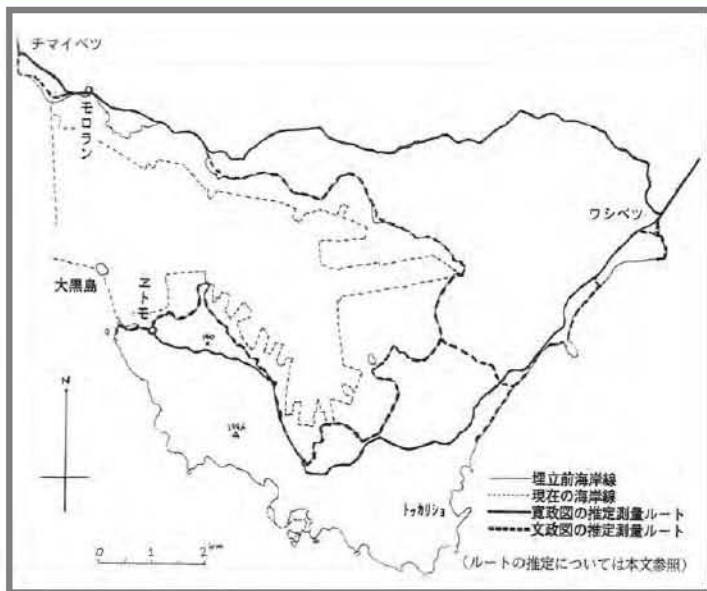
「文政大図」の室蘭部分 米国議会図書館蔵
（「伊能図大全」より転載）

文政上呈図の東蝦夷地は間宮林蔵の測量ではないのか、そんな疑問が離れない。図録の地図はやや不鮮明で、地名の読み取りにも、東蝦夷地の測線のルートを詳細に検討するにも不十分だった。そのため翌、平成十六（2004）年春、東博の資料館へ出掛け、大図の写真資料の入手手続きをした。国立公文書館にも寛政伊能大図の写し『松前距蝦夷行程測量分図』（以下、公文書館図。今回のプロジ

ェクトで比較対象とされた図）十軸があることが分かり、この写真資料も入手した。（こちらの写真にはスケールも写し込んであるので、原寸復元や縮尺調整に便利だった）

公文書館図を調べると、東博図では欠図だった襟裳岬付近も大きく異なっている。その他にも、文政上呈図の測線とは異なる部分が多々あること、「定説」と異なり、東蝦夷地も間宮林蔵の測量ではないか、との思いが益々強まった。

それまでアイヌ地名や郷土史について雑文を書いてきたが、伊能中図の東蝦夷地を寛政十二年と信じて書いてきたことは誤りだったことになる。



寛政・文政大図の室蘭測量の推定ルート (本誌41号再掲載)

思い直せば『測量日誌』の室蘭の往路の記事も、内陸のモロラン道を通ったと考えた方が、情景が合っている。後から考えれば直ぐ気がつくような、こんな単純な矛盾も、これまで全く気がつかなかった。

(3) アメリカ帰りの伊能大図展

各地でアメリカ帰りの伊能大図展が開催されるようになり、七月には札幌でも開催された。

アイヌ地名の史料として、伊能大図の価値は計り知れない。北海道分全てを撮影する意気込みで出かけた。

室蘭部分は地形が複雑なこともあって、中図の測線の印象とは大分違って、大図の測線は海岸線に忠実に沿っていることがはっきりと確認できた。ただ、中図から大図へ地図の大きさ(面積)が数十倍大きくなっているのに、地名の数は余り増え

ていないのに拍子抜けした。(こんな事情を本誌四〇号の拙文「伊能大図とアイヌ語地名研究」に書いた)

アメリカ帰りの伊能大図が手軽に参照・引用できるようなったが、地名や郷土史について詳しく書けば書くほど、寛政十二年と文化十年代の内容の齟齬が気になって仕方がない。

「伊能図」についても、初心者がいきなり「伊能間宮図」と書いたのでは、単に「合作」の意味にしか取ってもらえない。

古地図や郷土史について本格的に勉強を始めていくつも経っていない者が「定説」に異を唱えるには勇気がいる。思いあぐねた末、考え方の未熟な点はご批判を頂くことを覚悟の上でまとめてみることにした。

2 拙文「間宮林蔵の東蝦夷地測量」

2005年の間宮海峡発見二百年などで話題になり、間宮林蔵について一般の方々の認識も、拙文を書いた当時と大分変わっていると思われる。当時の事情を振り返りながら、拙文の概要を紹介してみたい。

(1) 間宮林蔵の測量技術

まず問題提起の前提となる間宮林蔵の測量技術そのものについて、一般の方の認識が十分ではないと思われた。伊能図研究の名著、保柳睦美編著『伊能忠敬の科学的業績』には、間宮林蔵の測量技術者としての技量への疑念が書かれている程だから、いきなり「間宮林蔵」では受け入れてもらえないし、これでは先へ進めない。

幸いなことに、既に本誌には、佐久間達夫氏翻刻の「伊能忠敬の江戸在住日記」が紹介されていて、間宮林蔵が伊能忠敬から測量・天測技術を伝授されていた事実は明らかにようになってきていた。

それらを材料にさせて頂いて保柳睦美の間宮評価を反証することから始めた。(海野一隆が間宮林蔵の技量をもっと否定的に見ていたことは、当時はまだ知らなかった)

その後、拙文「今井八九郎の「室蘭図」」(本誌66号)で間宮林蔵の弟子(伊能忠敬の孫弟子に当たる)である今井八九郎の技量を通して、間宮林蔵の測量技術の高さを紹介できたので、この点の認識は少し改めて頂けたのではないかと考えている。

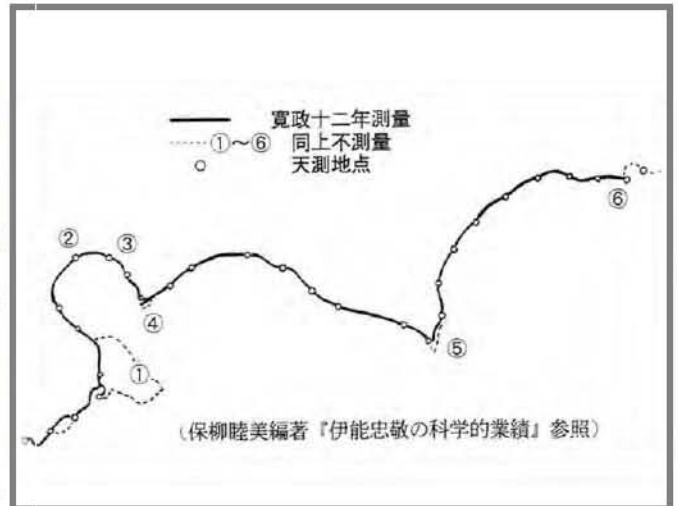
(2) 伊能忠敬は寛政図に不満だった

また、文政上呈図の東蝦夷地も間宮林蔵が再測量したとして、伊能忠敬が何故その測量成果を採用した(或いは間宮林蔵に東蝦夷地の再測量を依頼した)かを説明する必要がある、このことは序文の中で簡単に触れた。

つまり、伊能忠敬が自身の蝦夷地での測量成果に満足していなかったことについて、第二次測量の幕府への申請に際し「真の地図とは難申上」とまで述べていることなどを紹介した。また、室蘭地方の両図の検討図を作る過程で、寛政十二年の伊能測量には大きな誤差があることが分かったので、このことも伊能忠敬が寛政の測量結果に満足していなかった材料の一つとして本文の中で紹介した。

(3) 間宮林蔵の再測量の根拠

寛政大図と文政上呈図との違いを説明するのに、公文書館図も東博図も模写図針孔が無いなので、模写に伴う狂いや誤写などを含んでいる可能性があるから、単に重ね合わせて「合わない」というだけでは、納得して頂けないだろうと考えた。また、伊能忠敬の旅の往きと帰りで別の測量データがあったのではないか、などの反論が出るかもしれない。このため、伊能忠敬が往復では別のル



寛政大図における蝦夷地「不測量」箇所（本誌41号再掲載）

ートを通っている室蘭地方について、寛政・文政の両図に相違があるのは説明に好都合だった。

ただ、文政上呈図にも寄せ図の作製過程（下図の組み合わせの段階で生じたと思われる）での大きな誤描も見つかった（同様の誤描は、石狩・勇払の横断測量線でも見つかっている）ので、そのまま重ね合わせても説明の意図を理解してもらうのは難しいと思われる。そこで、旧道・旧地形を調べてあった地図類を基に、伊能忠敬が通ったであろう旧山道、間宮林蔵が測量したであろう旧海岸線を復元して、その測量線の相違を分かりやすく明示することにした（四一号挿絵（推定ルート図）参照）。

その他の「不測量」の部分については、間宮林蔵の再測量の可能性を指摘した。（その他、細部で測量が先に進んでいる事など異なる点が多々あることを挙げて）ただ、再測量と思われる他の地域の検討が済んでいなかったため、結論は少し控え目に表現

せざるを得なかった。

（4）わずかな反響

拙文の掲載後、伊能陽子・安藤由紀子両氏から、感想と今後の励ましのお便りを頂いた。両姉ともご面識はないものの、いずれも伊能忠敬研究ではご高名の方達だったので、大変有り難く思った。安藤氏も両図の相違を不審に感じて居られたこと、伊能氏は伊能忠敬記念館の方も針穴の違いに気付いて居られたとのことだった。

思いもかけないお二人のお便りにその気になって、次号には身の程もなく「余話」として、伊能図を間宮図とする必要はなく、敢えてすれば「伊能間宮図」・・・・などと駄文を載せて頂いた。

その後しばらくして、本誌に室蘭図についての解説が掲載された。早速読んだが、その内容にはがっかりした。

文政大図を寛政十二年の伊能忠敬の測量という前提で書いている。この間、室蘭の会所はエトモから対岸のモロランに移ったり、いろいろと変化があった。解説は推論たくましく文飾され、当然ながら、史実とは合わない外的内容になっていた。

著者を気の毒に思うよりも、拙文が読まれていること、注目されていることが、への落胆の方が大きかった。伊能氏、安藤氏という、伊能忠敬研究には造詣の深い方達に注目され、その気になっていたが、この分野で無名の雑文を読んでもらえるはずはない、ということを感じ知らされた。追報を執筆する気持ちはすっかり萎えてしまった。

3 佐久間達夫氏の論考について

間宮林蔵の東蝦夷地測量については、佐久間達夫氏の論考についても触れておきたい。

拙文と同じ四一号に佐久間達夫氏の「伊能忠敬と間宮林蔵 師弟の絆が蝦夷地の地図完成（二）」が掲載されている。

四〇号には（一）が掲載されていて、この道のベテランなら当然事前に参照し、拙文の参考文献に掲げるべきところで、初心者の不勉強とはいえ、佐久間氏には大変に礼を失することだった。

四一号の（二）の中に「蝦夷地全図」という挿絵があり、細字ながら凡例に伊能忠敬・間宮林蔵の測量ルートが示されている。その間宮林蔵の測量ルートは東蝦夷地（太平洋岸）も含んで全道を一周している。本文には、「・・・林蔵は、文化十年から三年程の年月をかけて、蝦夷地の沿岸全部と内陸部の長万部から歌棄迄と勇払から石狩迄とを測量したようである。」

・：記念館で保管している「蝦夷の下絵図」は、林蔵が実測した資料をもとにして作製したものといえる。・・・（傍線、井口）と書いている。

東蝦夷地の測量についてはこれ以上の記述はなく、「蝦夷地の沿岸全部」の測量については、間宮林蔵の「下絵図」が存在することを根拠としているように思えた。

このことについて四〇号の（二）では、「蝦夷地についた林蔵は、文化十年から十二年にかけて（林蔵が蝦夷地を、いつ、誰と、何処を測量したかについての資料は皆無といつてよい。従って「忠敬先生日記」と「伊能忠敬書状」より推測 忠敬の未測量地であった蝦夷地の南海岸以外の沿岸を実測したようである。（傍線、井口）と書いていて、蝦夷地の南海岸（東蝦夷地）の測量についての記述の仕方が（二）とは全く異なっているのが気になった。

ここでは明記していないが、佐久間氏は挿絵も

含めて既にこのことを何処かに発表されているのではないかと考えたが、上記のように礼を失した事情から直ぐに佐久間氏に問い含ませることを躊躇し、自分で探してみることにした。

その後、大分たつてしまったが、挿絵は1886年二月私刊「新説・伊能忠敬」の挿絵「間宮林蔵測量の蝦夷南海岸以外の経路図」(1886年六月、大空社「新説伊能忠敬」に再掲)を描き改めたものであることがわかった。ただ、管見ながら、前掲のような間宮林蔵の東蝦夷地測量の事実についての記述は見つからなかった。こんなことでぐずぐずして直接問い会わせることも出来ないうちに、佐久間氏は思いがけないほど急に逝ってしまった。

4 今後の伊能間宮図の研究について

(1) 各地の詳細調査に期待

室蘭以外の不測量部分や間宮林蔵による再測量が明らかな部分があることは四一号に紹介した。既に書いたとおり、地図に不慣れな一般の方に両図の相違について納得して頂くには、推定される当時の測量ルートを具体的に示して、それぞれ相違をていねいに説明する必要があると思う。ただ、模写による狂いなどもあるだろうから、淡々たる浜伝いの地域での相違を説明するのは容易でない(渡辺一郎氏は、間宮林蔵が難所の測量をしたことが確かならば、平坦な場所だけを測量しなかったはずはないから、全て間宮林蔵の測量と考えてよいはずだ、と示唆された)

拙文を書いた当時は、各地の山道についての研究が未だ十分でなかった時期だったので、寛政大図の測線が明らかに山道を通っている、ということを示せない部分が多かった。襟裳岬などは一瞥

して相違の分かる部分(伊能忠敬は山道、間宮林蔵は海岸線)だが、伊能忠敬の通った寛政十二年当時の山道の詳細なルートの解明が不十分で(中図程度ならばどうにでもなるが、大図となると曖昧では済まない)、九年前には説得力のある図示が難しかった。

現在では、各地で寛政十一年以降の幕領期に開削された当時の山道についての研究も大分進んできたので、これらの成果を積み重ねれば、十分説得力のある説明ができるだろう。

その他、伊能忠敬が山道を通った部分以外でも、日程上一日で測量出来るはずの無いような地形が測量されていれば(例えば有珠地方、それを間宮林蔵の測量の根拠として説明できるはずである)。

ただ、二百年も前の十数年間の変化の話であるから、郷土史の知識を背景にして、現地を踏んだ上での説明が必要だろう。机上の検討だけで推論しても、単なる思いつき程度にししか受け取ってもらえず、十分な説得力をもたないだろうし、研究成果としての稔りも少ないだろう。

(2) 伊能間宮大図の価値

アメリカ帰りの伊能間宮大図の出現によって、寛政大図は(その測量成果を慎重に扱いさえすれば)北海道の歴史研究に計り知れない価値をもつものになった。例えば、大図の大縮尺の利点を生かして、復元調査の困難だった旧山道のルート復元調査への活用がある。

室蘭図での調査でも、これまでルートが全く不明だったエトモ道について、(図の誤差は大きいものの)細かい地形を勘案することで、ほぼ寛政時のルートを推定出来るようになった。

特に寛政・文政両図のルートが異なっているようであれば(図の誤差の扱いには慎重でなければなら

いが、蝦夷地幕領化初期から文化十年代までの十数年間の山道の改修・ルート変更の手掛かりになるかもしれない。その他、それぞれの異なる分野の視点で精査すれば、まだまだ興味つきない史実が眠っていることだろう。

あとがき

これまでご面識を頂いたことのない本会名誉代表の渡辺一郎氏から、一昨年一月に電話を頂いた。間宮林蔵の東蝦夷地測量について取り組もうと考えているが、間宮測量の拙文について、その後どうしているかとのご下問だった。突然のことで驚いたが、気持ちに萎えてしまった心境をお伝えした。

昨年七月には、報道機関への成果発表に当たって、これに先立ってお知らせ頂いた。昨今、大学教授を名乗る方ですら、素人の論考からこっそりつまみ食いする。こんな風潮の中で、終始「問題提起した著者」として扱って下さっていることに心から感謝している。

当初、注目されることの少なかった拙文が、九年も経ってから、こうして目の目をみることになった。思い直せば伊能陽子、安藤由紀子、渡辺一郎という、伊能忠敬への造詣が格別に深い方々の御目に止まっていたのは、この上ない幸運に恵まれていたのだった。

伊能陽子さん、安藤由紀子さん、佐久間達夫氏には、ご面識を頂かない内に相次いで逝かれてしまった。誌上を借りてご冥福をお祈りし感謝の意を表したい。

末筆ながら、この機会を与えて下さった渡辺一郎氏、かつて拙文の掲載にご支援を頂いた編集担当の福田弘行氏に感謝の意を表したい。

間宮林蔵の実地測量

―千島・カラフト島・蝦夷地―

高木崇世芝

間宮林蔵は寛政一一年（一七九九）、初めて蝦夷地へ渡航以来、文政四年（一八二二）までの二年間、蝦夷地のことに関わって活動した。

しかし、従来から林蔵自身の遺した記録は少なく大方は他の記録によつて考証せざるを得ないのが実情である。

本稿では、この間における林蔵の実地測量について、数少ない記録に基づいて具体的に述べてみたい。

林蔵の測量技術については、前半は秦億丸（伊勢の人、幕府雇、測量師であり、絵画にも優れていた、文化五年（一八〇八）八月没）に師事し、後半は伊能忠敬（佐原の人、天文測量家、文化一五年四月没）に師事した。

なお幕府は、寛政一二年八月、東蝦夷地（太平洋沿岸側）を直轄地としたが、文化四年三月、西蝦夷地（日本海・オホーツク海沿岸側）も直轄地として、全蝦夷地（千島列島、カラフト島も含む）が幕府の支配下に置かれたのである。

これが全て松前藩に返却されたのは、文政四年一二月であり、林蔵の蝦夷地での勤務時期は幕領時期とびつたり重なるのである。

一 クナシリ・エトロフ島の測量

久保田見達（備前の人、幕府の雇医師としてエトロフ島シヤナに在勤）の『北地日記』によれば、文化四年にシヤナにおいて林蔵と会い、「林蔵は蝦夷語によ

く通じ、其上此島の絵図を新規に作り、新道開方を初めし故地理は巧者」と記している。

このことは、「御普請役間宮林蔵二付御内意奉伺候書付」（『地学雑誌』一八九号間宮林蔵特集：明治三七年刊）に「林蔵儀蝦夷地御用御雇ノ最初ヨリ離島「クナシリ」「エトロフ」「シコタン」其外島々ノ地境寒地積雪ノ時節モ不相厭廻島測量致地図相仕立」とあることと符合する。そして、その折りに林蔵作成と推測されている『エトロフ島大概図』が下に掲げた図である。

この図は、凡例があり方位線も何本かは引かれているが、地形は空白が目立ち、南側全体の沿岸には地名の記入は極わずかしかない。作成年は文化三年から五年にかけてであろう。

ちなみにこの年、ロシア軍艦によるエトロフ島シヤナ襲撃のさい、林蔵が活躍したことはよく知られている史実である。

四年一〇月一三日、林蔵は伊能忠敬に羅鍼儀を依頼し



エトロフ島大概図 (39.1 cm×108.9 cm) 国立公文書館所蔵

ていることが、次の記録で判明する。

「蝦夷箱館調役下役庵原直一來る、間宮林蔵より羅鍼の儀、我等所持を急に無心致度申来に付、羅鍼二組相渡筈、則代金五両請取」（伊能忠敬江戸日記：『江戸の伊能忠敬』平成一四年刊）

二 カラフト島の測量

林蔵のカラフト島探検にふれる前に、それまでのカラフト島探検について簡単に年代と探検・調査した人名を記しておく。

①天明五・六年（一七八五・六）幕府調査隊の庵原弥六・大石逸平

②寛政二年（一七九〇）松前藩士の高橋壮四郎

③寛政三年（一七九二）松前藩士の高橋壮四郎ほか三名

④寛政四年（一七九二）幕府の最上徳内・和田兵太夫

⑤享和元年（一八〇一）幕府の中村小市郎・高橋次太夫

⑥文化四年（一八〇七）幕府の最上徳内・高橋次太夫（中止）

以上、松前藩は二回実施し、幕府は四回計画し、三回にわたって実施されたが、いずれもカラフト島の北部までには至らず、南部の沿岸線のみ探検・調査に終わっていたのである。

間宮林蔵の探検は、このような経過の後に実施されることになる。

文化四年一二月、幕府の林大学頭は天文方に対して世界地図の作成を命じた。

天文方・高橋景保は当時の俊英を集め、外国の優れた地理書・地図などを翻訳させる傍ら、自ら

北辺、とくにカラフト島の二島説、半島説について考証を開始した。それは、当時、ヨーロッパにおいても、我が国においても、カラフト島が二つの島からなるのか、またはカラフト島は半島なのか、離島なのか不明な時期であったからである。

文化五年一月二日に松前奉行吟味役・高橋三平重賢から伊能忠敬へ宛てた書簡に次のようにある。「エトロフ乱妨等之節、間宮林蔵儀は大キ骨折、同所にて一人と相聞申候、此節は私方ニ罷在、絵図など相認罷在候、然ル所、東都より之御下知にて同人義もカラフト見分之儀蒙仰」(『伊能忠敬宛高橋三平重賢書簡』安藤由紀子「伊能忠敬研究」三八号：平成一六年刊)

間宮林蔵のカラフト島探検を推薦したのは伊能忠敬、高橋景保、高橋重賢の諸説があるが、ここではふれない。

同年四月、松前奉行より正式に、松前奉行調役下役・松田伝十郎と幕府雇同心・間宮林蔵はカラフト島調査を命じられた。

二人は宗谷を出立、伝十郎は西海岸をすすみ、林蔵は東海岸を目指した。伝十郎はナツコで、海峡を見て対岸を遠望し、西海岸に出た林蔵と共に再びナツコまですすんで海峡を確認した後、閏六月中旬、二人は宗谷へ帰着した。

七月、再び、単独でカラフト島探検を命じられた林蔵は、カラフト島西海岸をすすみ、ホロコタンに達し、ここから戻ってトンナイで越年した。

翌六年一月、トンナイ出立、ナニオーまで北上して再びトンナイに戻り、ここから舟で海峡を渡り、対岸のキチーに着き、七月、満州府のあるデレンに到着した。ここで、清国と周辺諸民族との交易の様子を詳細に調べた後、黒竜江を下り、

海峡を横断して九月下旬、宗谷に帰着したのである。

この両年にわたる探検の過程で、林蔵は幕府に二通の報告文を提出し、二種類のカラフト島地図を作成、さらに黒竜江下流沿岸をスケッチした『満江分図書』(北海道立文書館所蔵)を著わしている。そして、高橋景保に二度、カラフト島地図について考証した書簡(一通は焼失、一通は国立公文書館所蔵)を出し、高橋重賢にも書簡(『唐太見聞記』所載：北海道立文書館所蔵)を、近藤重蔵にもカラフト島略図を添付した書簡(書簡不明、略図のみ東京大学史料編纂所所蔵)を出している。

第一次と第二次の二種類のカラフト島図について述べる。

第一次カラフト島図は文化五年閏六月に作成されたもので、自筆と思われる図が国立公文書館に所蔵『唐太嶋図』(八四・三×三三・〇)され、写しは、函館市中央図書館・八戸市立図書館(八戸南部家文書)・札幌市中央図書館に所蔵される。

第二次カラフト島図は文化六年一二月に作成され、自筆と思われる図が国立公文書館に所蔵『唐太嶋図』(六六・〇×三三・六)され、さらにオランダのライデン大学図書館に最上徳内・シーボルト旧蔵の『黒竜江中之洲并天度』があり、その写しが北海道大学附属図書館に八王子の松本斗機蔵旧蔵模写図『黒竜江中洲并天度』として所蔵されている。

村上貞助(秦檜丸の養子で、林蔵の同僚)自筆図は、九州国立博物館所蔵(『北蝦夷地部』折込図)、北海学園大学北郷文庫所蔵

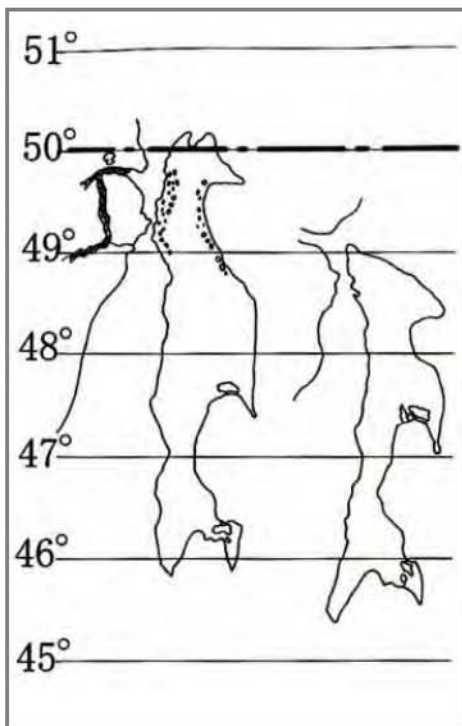
『東緯図記』折込図)などがある。

翌七年七月に村上貞助自筆と推測される『北蝦夷島地図』(全七枚組)が、国立公文書館に所蔵される。幕府に上呈されたもので、第一次図でも第二次図でもなく、カラフト島の西海岸のみを描写した六枚を縦に並べ、最北部の左側に黒竜江下流沿岸の一枚を並べるという精密な着色図であり、全長は一三センチ以上におよぶ極大型図なのである。

さて、この三種類のカラフト島図には、林蔵の大きな誤りがあったのである。それは緯度の計測である。

カラフト島の実際の全長は、北緯四六度付近から北緯五四度三〇分付近までである。ところが三種類のカラフト島図は、南端はほぼ正しいのだが、北端は五〇度付近とした。いいかえれば、実際の全長の半分しかなかったのである。

この図が、天文方・高橋景保の『新訂万国全図』に採用されることになるのである(後述)。



第二次図 第一次図

三 二種類の里程記

さて、この上呈『北蝦夷島地図』には、付随して、『北蝦夷島地図凡例附里程記』(村上貞助自筆)という一冊の折帳がついている。(以下、内閣本と略称する)

内容は、『北蝦夷島地図凡例・北蝦夷島西海岸里程記・東韃地方舟行里程記』の三項目であり、末尾に「文化七年庚午秋七月、間宮林蔵謹誌」とある。

東韃地方舟行里程記	
従北蝦夷地ナツコ岬至東韃地方デレン	
舟行里程	
北蝦夷地ナツコ岬	渡海三里半
東韃地方口・カマチ井	一里三拾二丁半
アルコエ	一里三拾二丁半
トウムシボ	

内閣本

東韃地方至徳樗假府舟行里程記	
北蝦夷島ナツコ岬至東韃地方キナー	
湖中ヲ経テ徳樗ニ至ル里程	
北蝦夷島ナツコ岬	三里半
東韃地方口・カマチ井	一里三十二丁半
アルコエ	一里三十二丁半
トウムシボ	二里十五丁
ムシボ	陸路二十二丁
タバマチ	

山内本

ところが高知県高知市の土佐山内家宝物資料館には『北蝦夷地大図凡例并里程記』(村上貞助自筆)一冊の和綴じ本・全一八丁、が所蔵される。(以下、山内本と略称する)

内容は、『北蝦夷島地図凡例・北蝦夷島東海岸里程記・北蝦夷島西海岸里程記・東韃地方至徳樗假府舟行里程記』の四項目であり、凡例の末尾には「文化八年辛未春正月、常陸、間宮倫宗謹識」とある。

すなわち、文化七年七月に上呈された里程記には、翌八年一月に改訂されたもう一冊が現存するのである。両本の比較によって、書名は異なるものの、共に村上貞助自筆本であることは間違いないが、両本の相違は、内閣本の凡例は六条であったが、山内本は一条追加して七条であり、里程記も山内本は随所に地名・里程ともに訂正・改訂が加えられており、大きな違いは「東海岸里程記」が新たに追加掲載されていることであろう。

さらに同資料館には、『北夷分界余話草稿』も所蔵されるのである。

題簽は『北夷分界余話』であり、内題を「北夷分界余話草稿」とする。全五冊であり、いずれも本文頁と挿絵頁は分かれて綴じられている。四・五冊目に「常陸、間宮林蔵口述、備中、村上貞助編輯」と記載されるが、年紀の記載は見当たらない。おそらく村上貞助自筆かと思われるが、どうであろうか。

上呈本『北夷分界余話』は全一〇帳であり、巻頭の凡例に「文化八年辛未春三月」とのみ記載され、署名はない。また、上呈本『東韃地方紀行』は三帳であり、巻頭の凡例に「文化八年辛未春三月」とあってやはり署名はない。いずれも国立公

文書館の所蔵である。

四 『新訂万国全図』の作成・刊行

先に述べた、天文方・高橋景保を中心としたスタッフによる世界地図の作成事業はすみ、まず、文化七年三月、『新訂万国全図』の手書き図が完成(国立公文書館所蔵)、ついで同八年に『万国略図』(新鑄総界全図・日本境界略図)が永田善吉の銅版で刊行、そして、林蔵の第二次カラフト島図を採用した『新訂万国全図』(文化七年三月識語)が永田善吉の銅版によって文化一三年に刊行されたのである。

しかし、すでに述べたように、林蔵のカラフト島図は緯度の計測を誤り、北端を北緯五〇度付近としたため、『新訂万国全図』(刊行図)もまた、カラフト島を五〇度以南に位置づけ、それに伴って対岸の黒竜江河口付近も北緯五〇度付近まで下げざるを得なかったのであった。

しかし、当時、ヨーロッパにおいても日本国内においても、カラフト島は一島なのか二島なのか、または離島なのか半島なのか、大きな謎とされてきたものが、林蔵の実地調査と作成図によって解かれるに至ったわけである。

五 蝦夷地の測量

文化六年十一月、カラフト島探検を終えた林蔵は松前に帰着、一二月から第二次カラフト島図の作成に入り、一年後の八年一月、江戸へ帰ったのである。

同八年五月、林蔵は伊能忠敬を訪ねる(『伊能忠敬江戸日記』)。以降、一月まで林蔵はたびたび忠敬を訪ねていることが『同江戸日記』によって判

明する。

一月末、伊能忠敬の測量出立を見送り、二月末、林蔵も江戸を立つて蝦夷地へ向かう。翌九年二月、松前に着き、ここで幽閉中のロシア艦艦長・ゴロウニンと会い、自己を語り種々の質問をしている。ゴウニンに記す。

「二人の新顔がやって来た。それは日本の首府から派遣されて来た間宮林蔵といふ測量天文家であった。(中略)自分の器具類をわれわれのところへ持つて来た。例へば、イギリス製の銅の六分儀、コムパス付きの古風な観測儀、作図用具、人工水準用の水銀などで、この品々の西洋風の使用法を教へて頂きたい」といふ頼みであった。(中略)彼は千島諸島中第一七島まで行き、サハリンにも行き、そのうへ満州領のアムール河に達した」『日本幽囚記(上)』井上満訳・昭和一八年刊

その後、林蔵は蝦夷地と江戸を何度か行き来していることが『伊能忠敬江戸日記』からわかるし、同一三年閏八月、蝦夷地の厚岸で宿泊していることもわかつている。

「閏八月一七日、間宮林蔵会所止宿。一八日、林蔵来」『日鑑記』厚岸町・国泰寺所蔵

同一四年一〇月から一二月にかけて、また伊能忠敬宅へ連日赴いていることも『伊能忠敬江戸日記』から判明する。

同一五年(一八二八)四月一三日、伊能忠敬は江戸で没した。享年七四歳であった。

このように林蔵の蝦夷地測量は文化九年から同一四年までの六年間断続的に実施されたのであるが、とくに注目すべきは、蝦夷地へ出立する前の八年五月から一一月までの六か月間は、実地測量するための測量技術の習得であり、蝦夷地測量中

の同一四年一〇月から一二月までの三か月間は、それまでの蝦夷地における測量データを伊能忠敬側に提出するための作業と再度の測量技術の習得のためであったであろうと推測されるのである。

六 「最終版伊能図」と林蔵実測

ここで「最終版伊能図」の蝦夷地部分と林蔵との関係について述べる。

伊能忠敬の全国測量の出発点となったのは寛政一二年(一八〇〇)の東蝦夷地測量からである。この年、幕府は伊能忠敬側の願いを聞き届け、「試みの測量」を許可したのである。

東蝦夷地測量は同年閏四月一九日から一〇月二一日までの一八〇日間、そのうち蝦夷地滞在は、往路は七九日間、復路は三八日間の計一一七日間であった。この間、蝦夷地で天文観測が行なわれたのは三三か所である。

この時の蝦夷地実測大図は国立公文書館に一〇枚組として所蔵される。

寛政一二年「実測大図」(一〇枚)と、「最終版伊能図」との比較によつて、東蝦夷地沿岸部の中で、アッケシ湾付近、エリモ岬先端部、エトモ湾付近、箱館山沿岸部などは、図形が大きく異なることは分かってきたため、東蝦夷地もまた部分的に林蔵の測量データが活用されていたであろうということが知られるようになった。平成二六年八月、伊能忠敬研究会によつて、東蝦夷地沿岸すべてが林蔵のデータによつて修正されたということが新聞紙上に大きく報道されたのである。

伊能忠敬記念館には、伊能図下図(したず)が数多く所蔵されている。その中には東蝦夷地沿岸・西蝦夷地沿岸のものも大小多く残っている。『伊能忠

敬関係資料目録・下図』伊能忠敬記念館編・平成一七年年刊。

これら下図(したず)の再検討も今後、必要となるかも知れない。

文化九年から同一四年までの蝦夷地測量の期間に作成されたと推測される林蔵作成のクナシリ島図を挙げよう。

左に掲げた図が『蝦夷クナシリ島図』である。島の西南部のみを描いており、林蔵の作成図であることは、「最終版伊能図」に見えるクナシリ島西南部と同形であり書き入れも一致するからである。この図に相当する下図(したず)も伊能忠敬記念館に所蔵されているから間違いはないであろう。

しかし、この期間、いつ林蔵がクナシリ島に渡つて実地測量をしたか、記録は皆無である。

蝦夷クナシリ島図
(78.2 cm×169.0 cm)
(国立公文書館所蔵)



七 内陸部の詳細な蝦夷図作成

伊能忠敬側へ自己のデータを提出した後、林蔵の蝦夷地測量はさらに続けられる。

文化一四年（一八二七）一〇月、林蔵自ら伊能忠敬へ象限儀を注文している。「一〇月一八日、間宮、象限儀注文す」『伊能忠敬江戸日記』

文政元年（一八二八）八月、林蔵、象限儀を持参して江戸を出立し、九月、箱館へ到着した。

「八月廿七日、象限儀にて間宮林蔵箱館へ通行」（陸奥国大畑の人・村林源助著『原始護筆風土年表（下）』昭和五七年刊）

さらに同二年四月、松前藩士・岡口民蔵が林蔵の絵図手伝となっている。

「申渡 岡口民蔵

其方儀当分間宮林蔵懸り分間絵図

仕立方手伝申渡

卯四月」（函館市中央図書館所蔵）

同四年五月、林蔵、高橋重賢と共に松前を出立、

六月、江戸へ帰着する。（洞富雄著『間宮林蔵』拾遺・補正⑬（昭和六一年刊）

文政元年から同四年まで、三年間余にわたる最終蝦夷地測量および松前藩士を雇用しての絵図作成が終了したのであろう。

ここで、あらためて文化九年（一八二二）から文政四年（一八二二）までの林蔵による蝦夷地実地測量についての概略を述べてみたい。

前後九年間にわたる蝦夷地測量は、幾度も江戸と往復しながらの実施であった。

その間の測量の様子を伝える記録は断片的で、ごく僅かしかなく、すでに記述した通りである。

秋葉實氏（北海道遠軽町在住、松浦武四郎研究家）は、

松浦武四郎の安政四年（一八五七）、同五年の膨大な手控え（野帳）と日誌、さらに『東蝦夷地誌』・『西蝦夷地誌』（いずれも刊本）などを調べられて、武四郎が蝦夷地調査の際に道案内のアイヌから、「ここまで林蔵を案内した」というような事を聞き、それを書き留めていることに気づき、「松浦武四郎研究会会誌」六号（昭和六二年刊）に「蝦夷地における林蔵の足跡」と題した論文を発表された。

それによると、二六か所ほど、地名は五〇以上に林蔵との同伴が記録されている。一例を記してみる。

「[己七]むかし間宮林造はセタナイより上り来り、イヌマカシの父ウロツケ此処より案内致し、下へこせし由。

「[丁巳]卷一九先年間宮林造様川すじ見分の節も、インヤより上りに相成候処、滝数ヶ所有之候に付、御戻り相成候。

「[丁巳]卷八」むかし間宮林造も此処へ行、是より奥へ行候事相成兼て、是よりもどりしとかや。

「[午十]間宮林蔵サルよりムカワえ越へ来り、セタニウシへ来り、此処にて滞留。

この記録は、林蔵が最後に蝦夷地を去った文政四年から数えても三六年後のことである。

しかし、案内したアイヌの人々は、この事実を記憶し、また子孫に伝えていて、武四郎に語ったのである。林蔵が案内人と共に蝦夷地の川伝いに奥地へと分け入った事が間接的であるが判明するのである。

次の頁に掲げた図が、国立公文書館にある『北海道実測図』という題簽名で所蔵されている蝦夷全図である。題簽名はもちろん明治以降の仮称で

ある。

図中に「誠斎」の印があり、これは幕吏で、箱館奉行支配組頭を勤めた向山源太夫（号を誠斎という）の旧蔵図であることが判明する以外にこの図の来歴を示すものはない。

しかし、この図こそ、林蔵自身の最終の蝦夷全図であろうと筆者は推測している。

その理由は以下の通りである。

①蝦夷地全体の図形は、「最終伊能図」の蝦夷地部分とほぼ同様である。

②未測量を示す点線が随所に見られ、シレットコ半島の先端部分が点線で描写、また、クナシリ島も西南部分のみの描写で、それ以外は点線で示される。これは「最終伊能図」の表現と一致する。

③図中に見られる記号の一部が天文方で使用した独特の記号印と同形で書き添えられている。

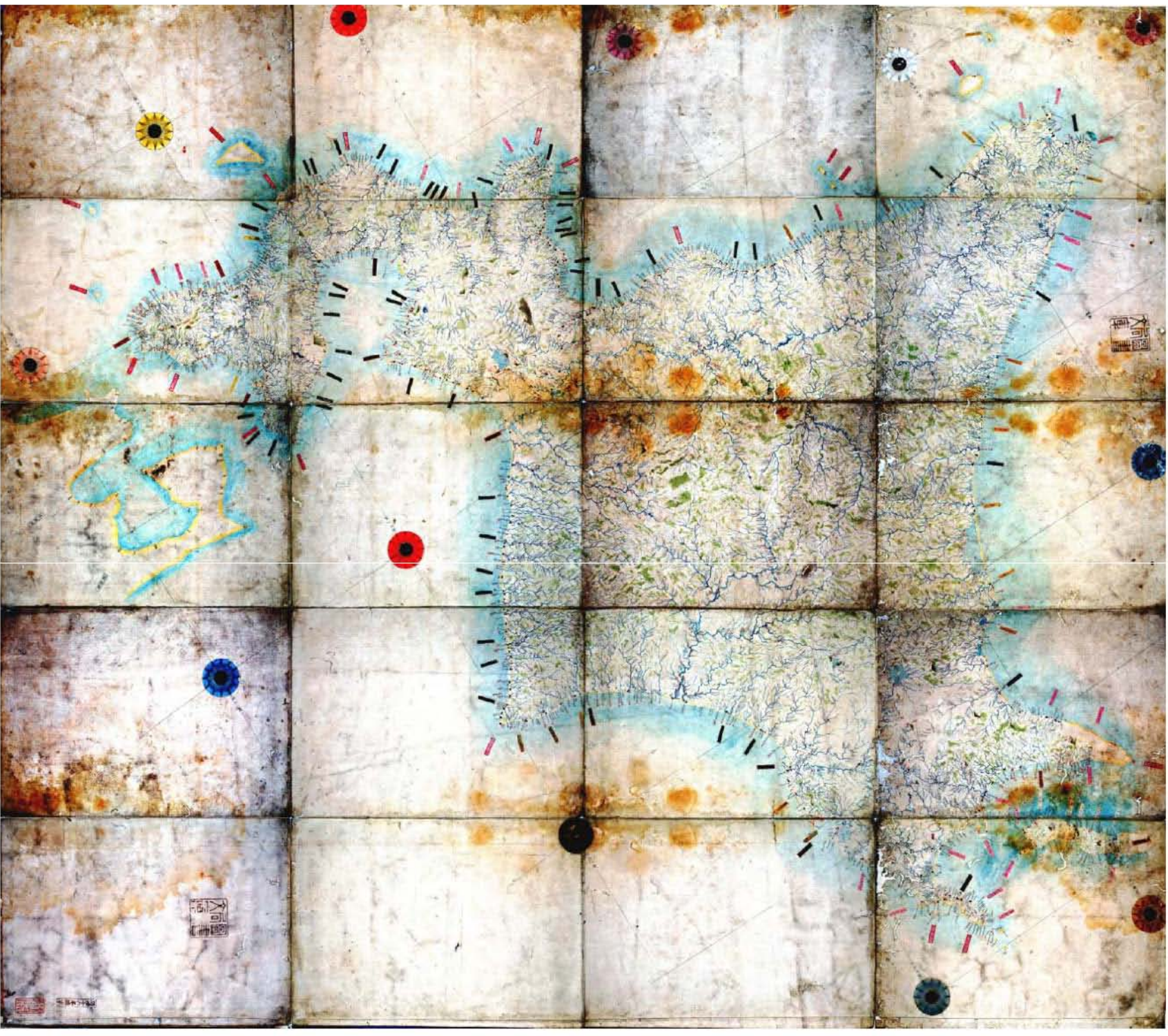
他に、☆印が東蝦夷地沿岸に六か所、西蝦夷地沿岸に八か所、内陸部に三か所にある。

また、「最終伊能図」でも未測量であった、箱館―恵山―鷲ノ木間が測量されていることは、明らかに「最終伊能図」データの後に作成されたことを物語っている。特にこの図の最大の特色は、内陸部を埋める大小の河川描写である。その数は五百余である。

文化九年から前後九年間におよんだ蝦夷地測量が、このような見事な蝦夷全図に結集されたものであろう。作成年代は、文政四年前後と推測されるのみである。なお同じ図は、北海道大学附属図書館に所蔵されるだけで、他に所蔵は聞かない。

完

北海道実測図 (132.0 cm × 114.5 cm)
(国立公文書館所蔵)



間宮林蔵の蝦夷地測量成果を比較

打田 元輝

比較図に使用した画像

①背景は、esri. ジャパンの衛星画像ベースマップから収録した画像であるが、経緯度線等は取得出来なかった。

※最初にランドサット8による画像を使用してみたが、サイトが英語版のため経緯度の読み込みが出来なかった。ほかに Google earth では経緯度線数値入りで取得できるが、画像の使用制限規定が難しく判断が出来ないので、使用を避けた。

② 水色太線は、研究会誌第七十四号の表紙に掲載された図の実測線である。

③ 桃色太線は、北海道実測図（本誌P29）の実測線である。

※後述一三の地図は、海岸線が大きく異なるので、左の図では比較せずに次頁以降に詳細を掲載しているので、宗谷東海岸部のみの比較を下記に補足表示した。

④ 赤線は、③北海道実測図の経緯度線である。
※間宮の内陸部を含めた最終図と考えて、コン

パスローズを残しその横にA〜Lの記号を今後の検討のために付記した。

⑤ 黄色太線は、武陽堂印刷の伊能中図の経緯度線である。

⑥ 茶色線は、実測切図（北海道庁「当時は国の機関」が明治時代に三角測量を実施し、発行した二十万分の地形図）の図郭（経緯度）線である。

※この地形図の海岸線は③図の海岸線とほぼ一致していることを確認しているので、その線の描示は省略した。なお、この図はある投影方によったもので、経緯度数が載っている。

以上から概察すると ③北海道実測図は非常に精度が高く、経度数は書かれていないがその方向は、⑥実測切図の140度線とほとんど平行に見えることから、間宮は伊能から教わった山島方位の観測による位置の修正を行わずとも、この時代にあつて極めて正確な地図を残していたと考えている。

残念に思うのは、間宮は高橋景保を全面的に信用していなかったのか、この図が長く民間にあったことである。早くに研究者の目にとまらなかった不運な地図であつた。

間宮の蝦夷地実測の記録が皆無のため図形と憶測で理解しにくいことをご容赦ください。

補足 宗谷東海岸トイマキ付近の比較

左端が、秦檣丸（村上島之丞）作製の図

一、元蝦夷地図



二、高橋 蝦夷図



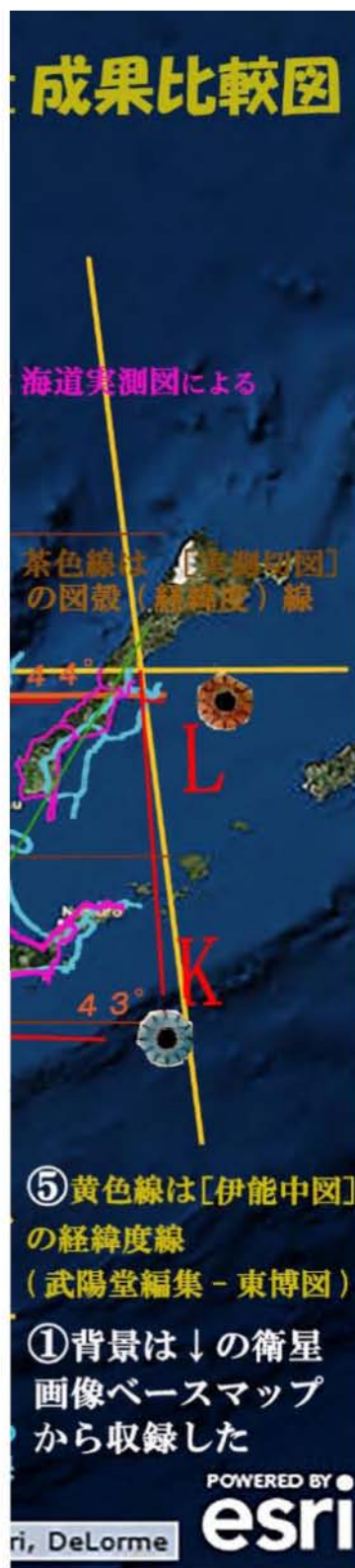
三、松前蝦夷地地図



北海道大学附属図書館から部分転載

国立国会図書館ホームページから部分転載

関係する地図データをDVD化する予定です。
関心のある方は uchiyan12@gmail.com まで。

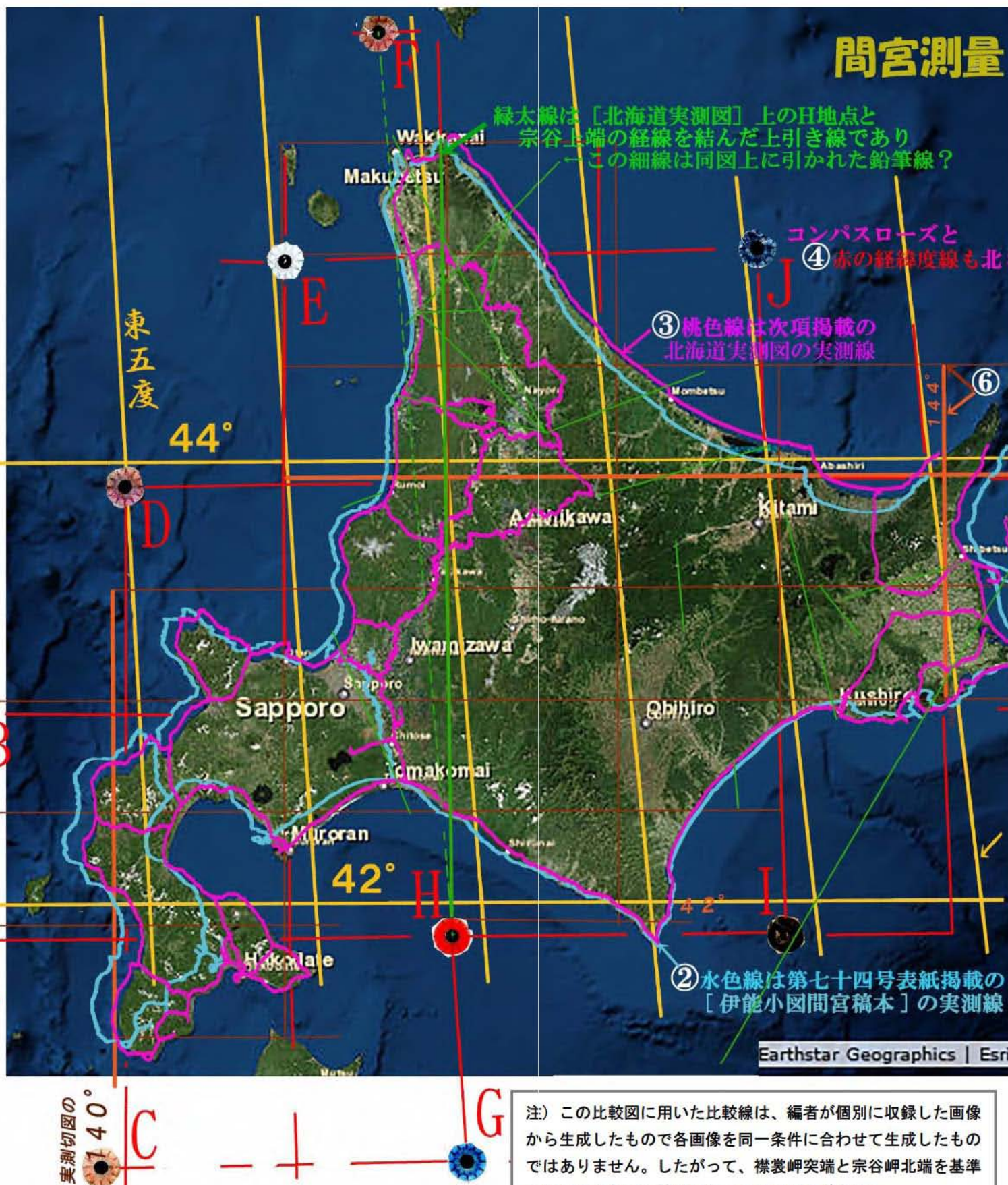


⑤黄色線は[伊能中図]の経緯度線
(武陽堂編集-東博図)

①背景は↓の衛星画像ベースマップから収録した

背景画像の使用に当たって esri ジャパンから上記の著作権情報を入れることで、使用の許諾を得ています。

間宮測量



一、気象庁旧蔵の元蝦夷地図

この図は、気象庁が所蔵していたものを近年国立国会図書館に移管した図である。所蔵機関の解題によれば、裏面裏書の「間宮氏実測」から外題が「間宮氏実測元蝦夷地図」と付けられたことが判る。幕府内部で作成されたものとみられる。と解説されている。

ほかは図外下部の解題を参照されたい。

なお、図の凡例部分を拡大表示しているが鮮明に見えないので、インターネットでご確認ください。



↑ 凡例の拡大

(103×165 cm)

タイトル： 間宮氏実測元蝦夷地図

出版者： 写

請求記号： YR8-N97

高木崇世芝著「近世日本の北方図研究」(以下「北方図研究」と記す)二二四頁においても☆印と凡例記号のほかに目だった解説はしていない。
○編者の憶測であるが、次の考えを記しておく。
①天文方が、伊能の測量成果と間宮からの成果を得て編集を始めた図であろうと考えられる。亀田半島の恵山方面が形も地名も詳しいのは間宮によるものである。しかし、白糠、阿寒までや阿寒から藻琴と斜里への二ルートなど、他の間宮図にはないものもあるので、間宮以外の情報も含んでいるのかもしれない

※間宮以外としては、伊能より先の師匠である秦檜丸(村上島之丞)のことが考えられる。
②その後、間宮の成果は伊能から測量を習った後のため、山島方位(交会法)の観測値が追加されて来たので、この図のままでは編集を続けることが出来なくなつたものと考えられる。
このため、変化の少ない地域はそのままとし、山島方位値の多い地域を再編集し、エトロフ、ウルップを増補した図が次の図と考える。
※この図には拡大表示したとおり二十六種類の記号が使われており、これとほぼ同記号が次図と③北海道実測図(226)にも使われている。



解題 図名は裏面裏書による。間宮林蔵の測量記録にもとづき幕府内部で作成されたものとみられる。幕府による蝦夷地の再直轄化に関連する安政ごろのものか。「間宮氏実測」という表現は「北蝦夷地分間図」と同じである。間宮の測量にもとづく高橋景保編の「蝦夷図」「日本図、蝦夷」(当館所蔵)と海岸線の形は類似するが小異もある。

根室湾と国後島、色丹島辺がやや異なる。また「蝦夷図」は「はめこみ図」の形で遠望のウルップ島まで描くが、本図はエトロフ島西端部まで。間宮林蔵は伊能図への測量記録提供(文化 14 年ごろ)後も文政 4 年(1821)まで蝦夷地での測量を続けており、亀田半島、天塩川、阿寒湖周辺など道東部一帯など、伊能図の北海道に比べると内陸部に増補部分がみられる。増補は文政 9 年、10 年ごろとされる高橋の図にも見られる。海岸線は墨、測線とみられる線は内陸部を通るもののみ朱線で表示されている。会所、番所、舟泊(規模別)、漁獵場、潮瀬など記号凡例は 26 種におよび、「蝦夷地」の範囲に関する付箋が 3 か所にある。

国立国会図書館ホームページから転載

二、師弟の蝦夷地測量成果

この図も国立国会図書館が所蔵するもので、解題に記載のとおりシーポルト事件の証拠品の一点である。

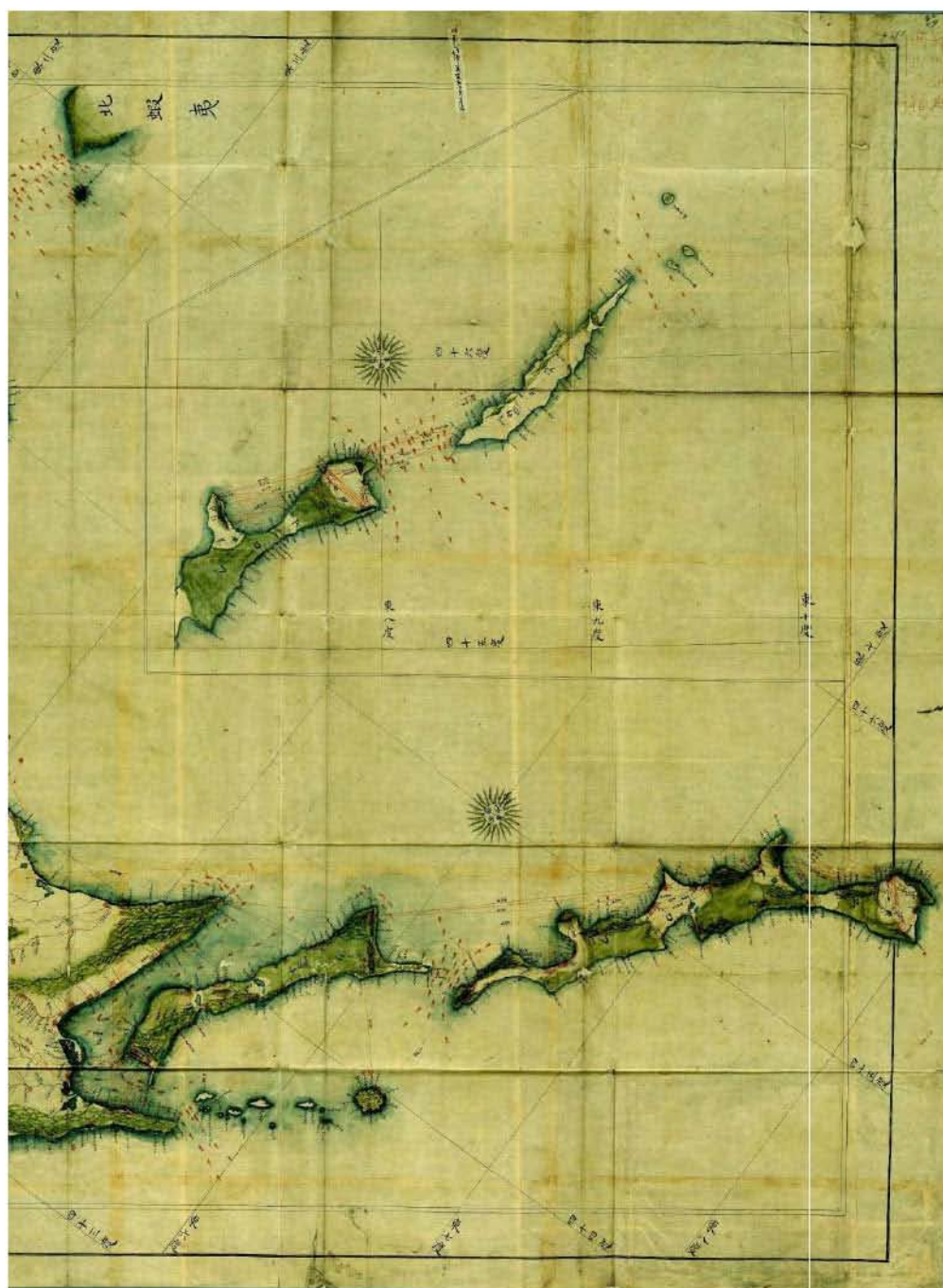
「北方図研究」二二二頁では、大谷亮吉、洞富雄、赤羽栄一氏の見解を紹介し、宗谷東海岸トイマキやシレットコ半島、ネムロ半島の前図との違いの特徴を記している。そして、間宮の成果

が採用されていることは間違いなく、高橋景保の編集である。と高木氏は解説されている。

○編者は、作成編集に当たっては前述前一の図の経過があつてこそ、この図への移行が行われたものと考えており、前図と重ねてみたところでは、トイマキやシレットコには大差がなく、根室半島とクナシリが北に上がり、エトロフ以東が増補されたとみている。また、村や田畑の記号から、その発展も知ることができる。

※次頁の下段に掲載したエトロフ島大概図が採用されていることがよく判る。

渡島半島日本海側に伊能測量以外の方位記録が描かれ、内陸部に河川と地名が増え、特に根室半島からクナシリ、エトロフ、ウルップの間にも多数の方位記録が描かれ、これによって修正がなされたのである。これで蝦夷地全域の図が纏まったので、景保はこの図をシーポルトへひそかに渡したものと考えられる。



注) 1、この図の凡例が左上枠内に8種示されているが、図内には前一図の凡例と同一の記号が多数朱印(天文方の印?)で押されている。
2、方位線が多数描かれているが、伊能測量と思われるものを青色で間宮測量と思われるものを紫色線で上引き誇張した。(一部分のみ)

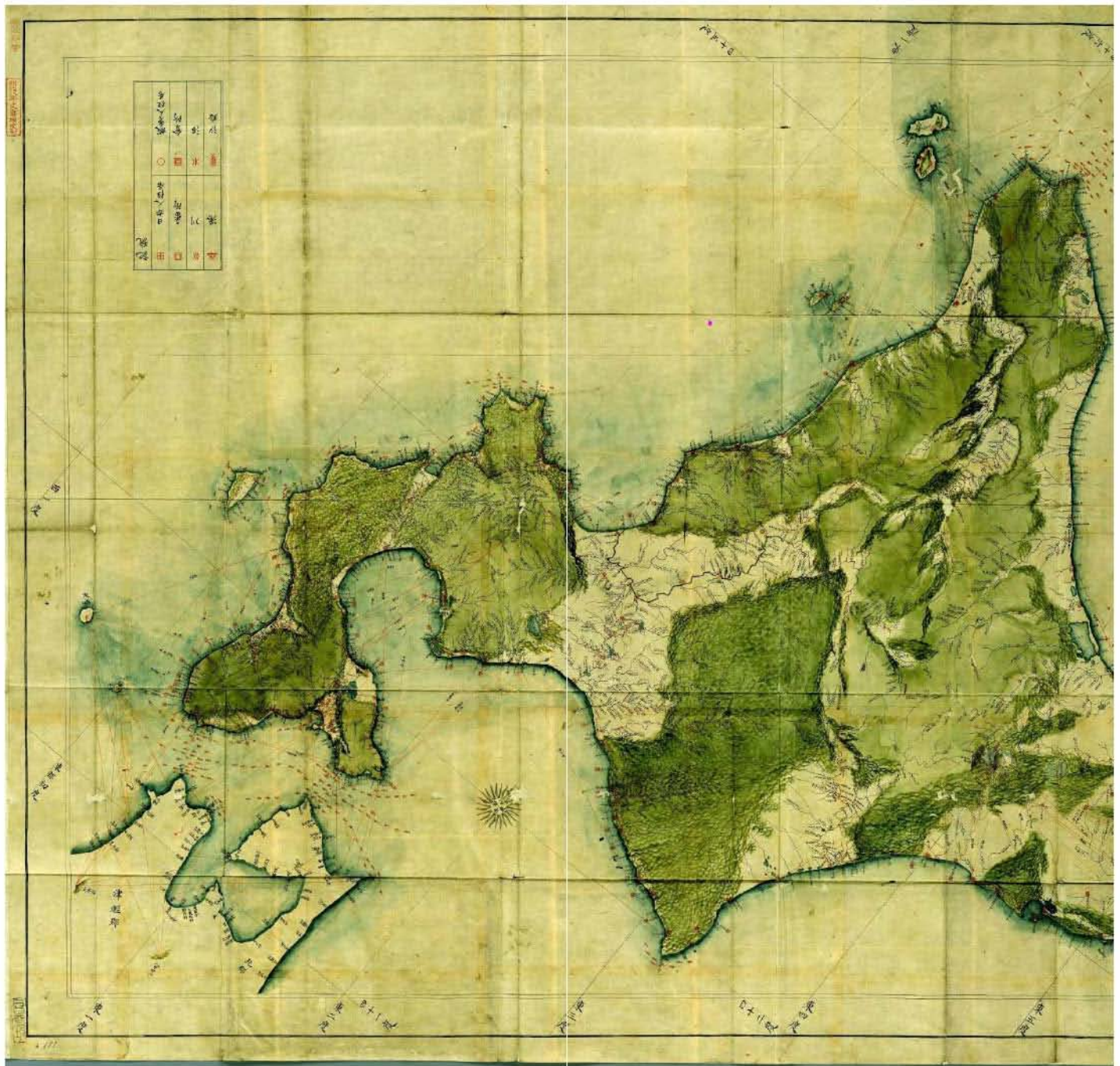
タイトル : [蝦夷図]

著者 : [高橋景保//作]

出版者 : 写

出版年月日 : [文政9(1826)頃]

請求記号 : 寄別 13-65



解題 手書 112×196cm

図には作者・作成年についての記載はないが、「此図を此儘に写取遣候義に御座候」なる付箋があること、および 1851 年シーボルト著『ニッポン』の付図として刊行された「江戸宮廷天文学者高橋作左衛門の原図による蝦夷島・日本領クリル」図と内容がほぼ一致することから、シーボルトがこの図の写しを取った文政 9 年(1826)11 月以前に、天文方高橋景保によって作られていた図であることは明白である。文政 4 年(1821)上呈の「伊能図」の北辺を、間宮林蔵による新資料によって補訂しており、空白のままであった陸地内部に山地・平野の区別を施し、河川・集落を詳細に記入する点が大きく異なる。また、沿岸の潮流の方向を矢印で示したり、本初子午線を江戸に置いているのも新しい試みとして注目される。

国立国会図書館ホームページから転載

三、最初の師が描いた蝦夷地嶋図

間宮林蔵の測量の師は秦憶丸が最初である。この図のことは「北方図研究」百七〇頁に詳しく載っているが、秦憶丸(村上志摩之允(島之丞)とも呼んだ)は伊勢国出身であり、幕府の雇いとして寛政十年(1798)以来、蝦夷地で多くの業務に携わっている。測量が出来、絵師としても有能であった。蝦夷島奇観やこの図が知られる。

この図は文化5年(1808)の作で、憶丸最後(この年江戸で病死)の優れた大型蝦夷図である。京都大学総合博物館に所蔵される自筆図にはアイヌ風俗画、松前・箱館・江差の三湊が描かれているが、写図には一切このような絵画の描写はない。現在、1枚に描写した図、2枚または3枚に分けて描写した図の3種が知られる。内陸部の河川にも詳細な地名が見られる。と高木氏は説明されている。

○ここに挙げた図は北海道大学附属図書館に所蔵される図類 651-1233 枚組を編者がキャプチャー編集したものである。

※この図について、地図余白に掲載した所蔵先の説明によると岡部牧太の図の「松前絵図」にほぼ等しく…と解説されているが、高木氏は、「松前絵図」の作者は出羽国出身の岡部牧太で

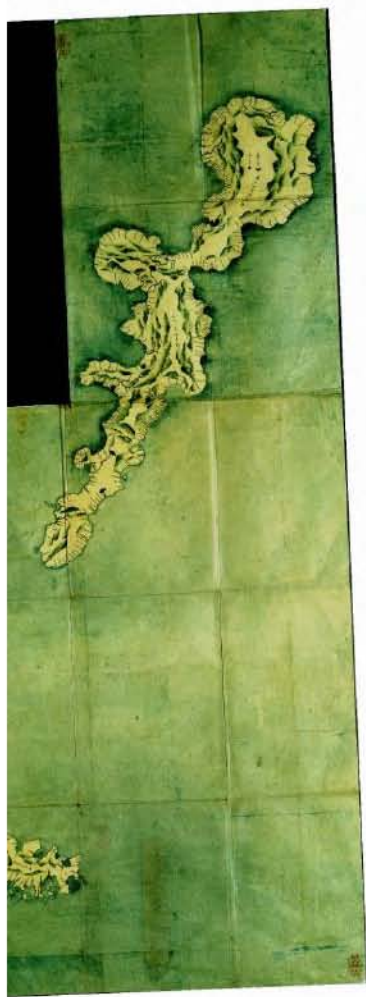
あるが、その経歴はよく分かっていない。文化3(1806)年に作成された岡部の図は、近藤重蔵の蝦夷図と同一であり、近藤図に基づいて作成したことが推測できる。近藤図との相違は、カラフト島北部が大きく半島状になっていることだけである。原図は秋田県公文書館に所蔵されており、この模写図が北海道大学附属図書館の所蔵図(軸物192)である。と説明されている。

○村上島之丞は、寛政十年に二十歳の林蔵を従えて蝦夷地に着任し、今後、北海道新幹線が通る新函館北斗駅近くの「一の渡」に住んだ。伊能は、寛政十一年(1800)測量の行きにも帰りにも村上宅へ寄ったというが、帰りの時は間宮はもう村上の下には居なかったという。

したがって、林蔵が伊能と対面したのは確かであろうけれども、はたして往路の時に師弟の契りが交わされたものか疑問が残る。

また、編者は秦憶丸が作図した時代からすると、林蔵も師と共に測量に歩いたことはないものだろうか、とも思うのであるが…

もう一点は、下部に掲載したエトロフ島図は、間宮が文化3(1806)年から4年に実測されたものと言われているが、なぜこの図に採用されなかったのだろうか…



北海道大学附属図書館から転載(編集)

(108×116cm, 131×116cm, 116×134cm)

トロフ、シコタン、ハボマイ諸島を含む美しい大図。輪郭は岡部牧太の非常に正確で、測量方位線多数あり。詳細な海岸の地名のほか、内陸部の

13年2月村山直之(場所請負人)写之の記事と印章あり。

調査が加わったものか。

(北大北方資料室)

エトロフ島大概地図 国立公文書館蔵



岡部牧太「松前絵図」

北海道大学附属図書館蔵



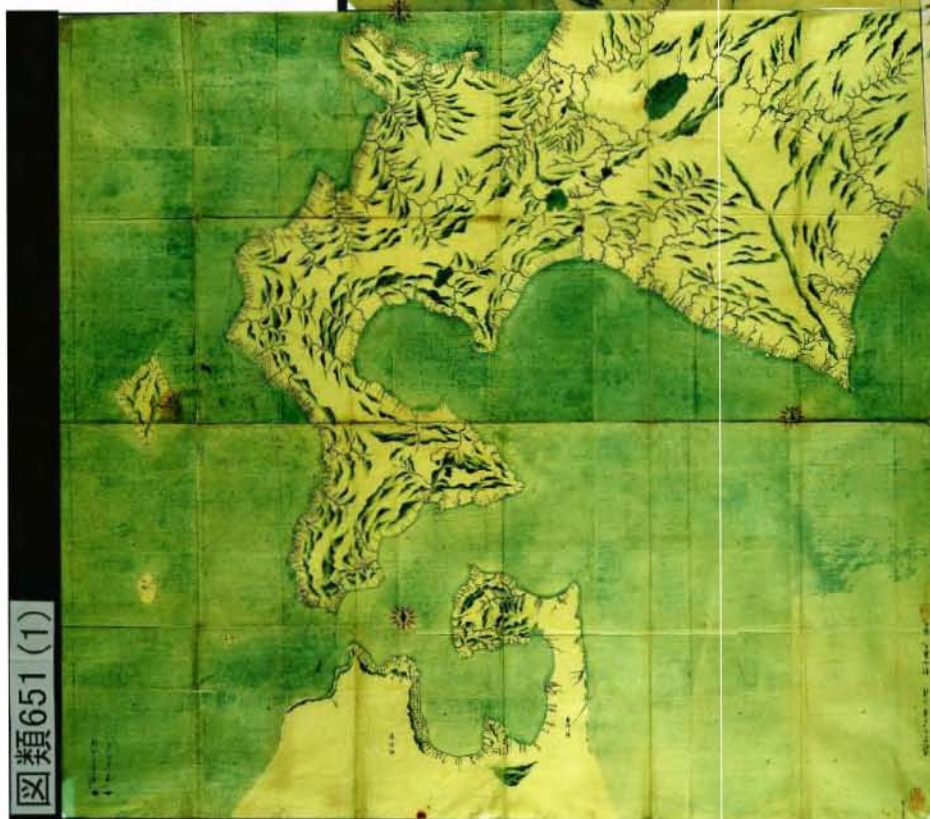
近藤重蔵「蝦夷図」
(エトロフ島の部分)
函館市中央図書館蔵



図類651(2)



図類651(3)



図類651(1)

松前蝦夷地嶋図 (マツマエ エゾチ トウズ)

成立年 文化13年(1816)

形態 手書 彩色 3葉続

内容説明 北海道のほかクナシリ、エ
「松前絵図」にほぼ等しく
川筋の地名も記入す。文化
岡部の地図に間宮林蔵の

請求記号 図類651(1.2.3)



間宮林蔵・道南測量の足跡

北海道福島町 中塚 徹朗

私の住む、北海道南西部の福島町は、記念すべき伊能忠敬第一次蝦夷地測量のスタート地点である。寛政十二（1800）年五月一九日福島町字吉岡の吉岡川川岸に上陸（伊能書状）した忠敬一行の測量の旅は、八月七日道東の西別まで到達し、八月八日来た道へと折り返す。九月一七日再び吉岡を経て九月一八日松前弁天の測量を最後に蝦夷地測量は終了した。残された北側部分（西別から北回りで松前弁天まで）や不測量箇所は後に、間宮林蔵に託された『贈間宮倫宗序』とされる。

文政四（1821）年七月幕府に上呈された『大日本沿海輿地全図』の附属資料である『大日本沿海

実測録』の序文・凡例にも「更取間宮林蔵所測、参補地図」、「一 蝦夷地方測量未完備、故今取間宮林蔵所測、以参補之」の記載があり、間宮林蔵が伊能忠敬の全うできなかった蝦夷地測量を補ったことが確認できる。則ち、蝦夷地測量は、忠敬と林蔵の師弟による共同作業と考えられてきた。一九〇年以上を経た今日までこの考えは定説となっていた。

ところが、今年二〇一四年八月一八日。間宮が全ての蝦夷地測量を行ったという新説が伊能忠敬研究会により発表された。報道発表資料によると、二〇〇五年に伊能忠敬研究会井口利夫氏から研究会報四一号において「最終版伊能図の北海道図は、すべて間宮の測量データで完成されたのではないか」との問題提起がなされた。調査の結果「最終版伊能図の北海道東南部分の測線は、ほとんど伊能の第一次測量の測線と合致しないことが分かった。間宮林蔵により測り直された可能性が高い。」との結論に至った。

則ち、「蝦夷地測量は、間宮林蔵が全てやり直した」という新説である。

報道関係を通じ全国に大きな波紋が広がったが、北海道においても「間宮林蔵 道全域を測量・伊能図「合作」覆す可能性」（北海道新聞八月一九日朝刊一面記事）と大きく取り上げられた。

間宮林蔵、宮歌村で道路測量・行動記録発見
二〇一四年八月二五日、この「新説」を裏付ける可能性のある資料が福島町永田文庫で見つかった。（左写真3、左写真4）



写真3、大正2年8月編纂『吉岡郷土誌』表紙 福島町永田文庫蔵

その資料とは一九一三年（大正二年）に「吉岡村教育會（現在の教育委員会）」が編纂した『吉岡郷土誌』である。
それには「文化十年四月間宮林蔵道路測量ノタメ来村 草分日記」と記されている。

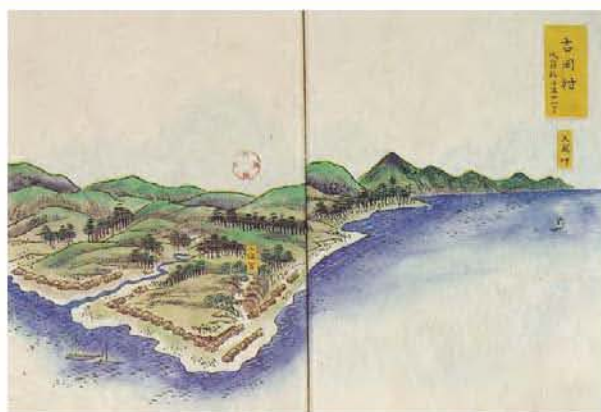


写真1「延叙歴検真図」安政5年(1858)頃の吉岡村
幕吏目賀田帯刀による鳥瞰図 函館市中央図書館蔵



写真2、現在の福島町字吉岡の空撮
中塚建設株式会社提供



写真4、発見された
間宮行動記録『吉岡郷土誌』8頁

発見者は福島町史研究会会員で宮歌村文書研究者の米塚誠さん。

これまで間宮林蔵の蝦夷地測量記録は、次のように皆無とまで言われていたので貴重な発見だ。
・「林蔵が、蝦夷地をいつ、誰と、何処を測量したかについての資料は、皆無といってもよいほどにない。」(佐久間達夫『伊能忠敬研究』第四〇号)

・「林蔵の蝦夷地実測に関しては、その経過を知るべき資料は皆無と言つてよい。」(洞富雄『間宮林蔵』)

はたして、文化十年間宮は蝦夷地西部南海岸に居たのかどうか、矛盾はないか？前後の足跡を確認してみる。

・文化九(1816)年 林蔵、松前で捕虜ゴローニンと会う。

・文化十四(1819)年 林蔵帰府、測量データ提出(三八巻)。忠敬宅(地御用所)泊込みで引継ぎ。(伊能忠敬研究会『伊能忠敬、間宮林蔵関連 略年表』より)

林蔵は、文化九年には宮歌村から二〇km弱の松前に滞在し、文化十四年江戸に帰っている。この間の文化十(1818)年に蝦夷地の西部南岸の宮歌村を測量していても矛盾はなさそう。

『吉岡郷土誌』について

明治三九(1906)年四月一日 北海道二級町村制施行により松前郡吉岡村、礼髭村、宮歌村の三村が合併し、新たな吉岡村(現在は、北海道松前郡福島町)が発足した。

これを記念し大正二年に編纂されたのが、『吉岡郷土誌』である。

総論・沿革・戸口・総括・教化・経済・生業及産物・交通・風俗習慣・結論・附録の二一の大目次・六六頁余から構成されている。その中の「沿革」の項に吉岡村に合併する前の旧宮歌村に関する事項の欄があり、備考欄に「草分日記」からの引用と明記されている。

残念ながら出典の「草分日記」原本の所在は現在行方不明である。

しかし、この『吉岡郷土誌』の冒頭(五〇六頁)から、「草分日記」とは、村の草創期からの来歴を記録した文書であるようだ。村の重要な歴史のトピックスとして、「間宮測量」も取り上げられているのではなからうか。

「……宮歌村ハ寛永三寅年四月十八日津軽鯨ヶ沢ト申處(以上地名)ノ者……六名吉岡村ニ上陸澗内沢(白符村)ニ住居シテ……波浪高キ故午年ノ九月ヨリハ當村ニ引越……西ノ年ニ至リテ家数二十ヲ算スルニ至レル旨宮歌村草分日記(宮歌八幡宮奉蔵)ニ記載セリ。」(『吉岡郷土誌』の「沿革」の冒頭(506頁))

また、「宮歌村草分日記(宮歌八幡宮奉蔵)」の表記から、「草分日記」は、「宮歌村文書」(道指定有形文化財)そのものであることを示している。

宮歌村は、現在の松前郡福島町宮歌。寛永十二(一六三五)年に藩主一族の松前八左衛門の知行地となり、文化四(一八〇四)年に幕府直轄、文政四(一八二二)年に再び松前藩領となる。この間、元文四(一七三九)年から明治十(一八七七)年頃まで、東隣の白符村との間で領地の帰属をめぐる村境争論が続き、この文書群が今日まで残る契機になったといわれる。資料は、このほか、宮歌村及びその枝村の経営関係、宗門改、地券、八幡神社関

係などがある。北海道には残存が珍しい近世村方文書である。

宮歌村の共有文書として宮歌八幡神社で保存され、現在は福島町教育委員会に寄託されている。明暦二(一六五六)年〜明治二二(一八八九)年 一〇四点(北海道立文書館のHPから引用)

今回資料が見つかった測量箇所福島町宮歌村は、松前町より東方に位置し、伊能が寛政十二年に測量した測量ルート上に重なる。このことは、間宮が師匠伊能の行ったルートを再度測量した証明になるのではなからうか。

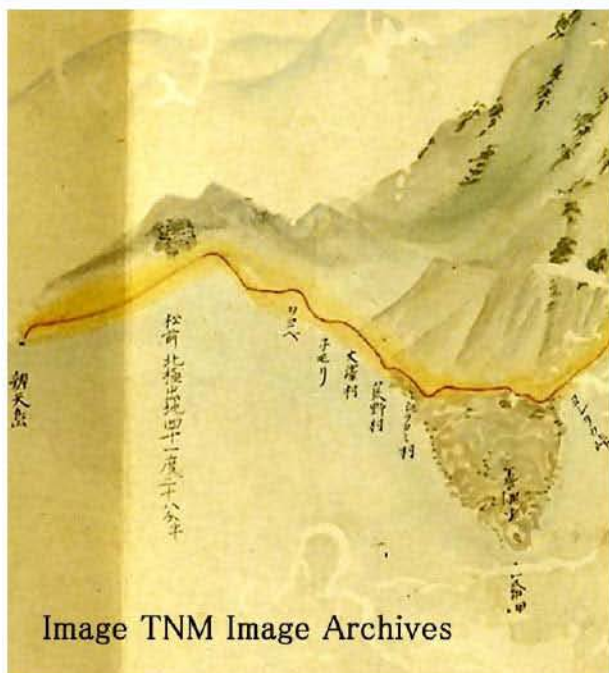
間宮が全ての蝦夷地測量を行ったという新説を裏付けるためにも「草分日記」の発見が期待される。

二本の測量ラインのナゾ

冒頭で述べたように、寛政十二年の第一次蝦夷地測量のスタートは現在の福島町宇吉岡からと考えると、西別で折り返した伊能測量隊の足跡は、吉岡以西松前弁天までは、一度きりの測量であるので、ルートは単線となる筈だ。しかしながら、最終版伊能大図(米国議会図書館所蔵 松前)では、白神岬を通るラインと吉岡峠を通るラインとで二本複線表示となっていることに気づく。

測量日記で確認すると。

・九月十七日 昼ハ曇晴夜ハ晴、朝六ツ半福嶋出立……福嶋より一里程行吉岡、夫より半里程吉岡峠(白カミ峠と云 海岸白カミ岬也)大峠なり松前着ノ砌町役人並ニ栖原屋庄兵衛(箱館会所御用聞なり)子小右衛門出迎、宿へも見舞(『伊能忠敬測量日記』千葉県史料 近世編)



「蝦夷地実測図」(弁天～吉岡までの部分)
伊能忠敬 第一次測量後の大図 東京国立博物館蔵
※この図の実測ラインを図1に赤線で比較している

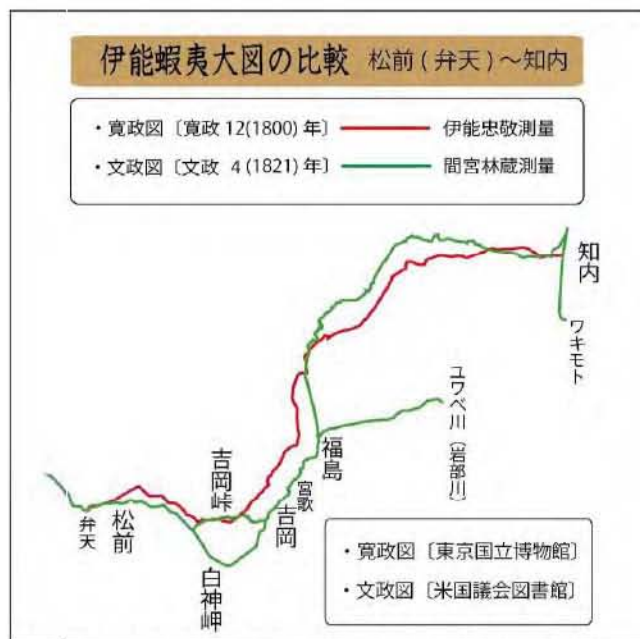


図1 伊能の寛政大図と文政大図の測量ラインを
トレースし松前・知内を端点として重ねた

大峠とは、難所の峠の意。伊能隊は、吉岡峠（白神峠とも）を通って松前に到着している。白神岬の海岸は不測量とし、峠道を測量したのだ。

因みに、福島く松前間の白神岬海岸の通行は、波の状態が良ければ通常は、峠道よりも海岸道を一般に優先したと言われている。

（白神岬海岸にみねこの崎という地名が今現在残っている。脱いだ着物を頭上に載せて波ぎわを通行する時、「はだかを」見ないでね」の意。見ねっこね↓みねこの崎）伊能隊は、荒波に遭遇し、やむなく山道測量に切り替えたのだらう。では、海岸線を測量したのは誰なのだろう？

さて、ここで「松前く知内」の範囲に限定して、寛政図（一八〇〇年）と文政図（一八二一年）との比較をしてみた。（図1、参照）

寛政図と文政図が同じ測量隊によるものであれば、一つのラインに重なるはずである。

しかし、図1のように大きくズレが生じている。このことから、二本の測量ラインは、同じ測量家によるものではないということが言える。

伊能大図に測線を残すことができる伊能忠敬以外の測量家とは、師弟関係にあり「参補」の測量を託された人、間宮林蔵ではなからうか？

道南から「新説」を裏付けすることができるのかというテーマで、初めて投稿させていただいた。

機会をくださいました渡辺一郎先生に感謝申し上げます。また、御教示をいただきました故永田富智先生、米塚誠さんに感謝申し上げます。

（参考文献）

『福島町史』永田富智
『吉岡郷土誌』吉岡村教育會 永田文庫
『伊能忠敬』大谷亮吉 名著刊行會
『間宮林蔵』洞富雄 吉川弘文館
『伊能忠敬書状』千葉県資料近世編
『伊能忠敬、間宮林蔵関連 略年表』伊能忠敬研究会
『伊能忠敬研究』佐久間達夫第40号
『伊奈町史』
『伊奈の歴史』
『間宮林蔵』間宮林蔵生誕二百年祭実行委
『傳記』第十卷・第3号
『間宮林蔵』赤羽榮一
『日本公論』第二十卷
『伊能忠敬測量日記』千葉県史料 近世編
『伊能忠敬測量隊』渡辺一郎

間宮林蔵 釧路・厚岸を通る記録

打田 元輝

「完全復元伊能図」(伊能忠敬研究会の四一頁から引用させていただくと)：

第二三号「釧路(アメリカ大図)

伊能測量隊は、厚岸まで測量した後、根釧原野を横切つて西別に達した。第二三号には、蝦夷三官寺である国泰寺が記載されているが、伊能忠敬が厚岸を訪れたとき、国泰寺は未だ開かれていなかった。後に間宮林蔵が測量して国泰寺を記入したものである。…とある。

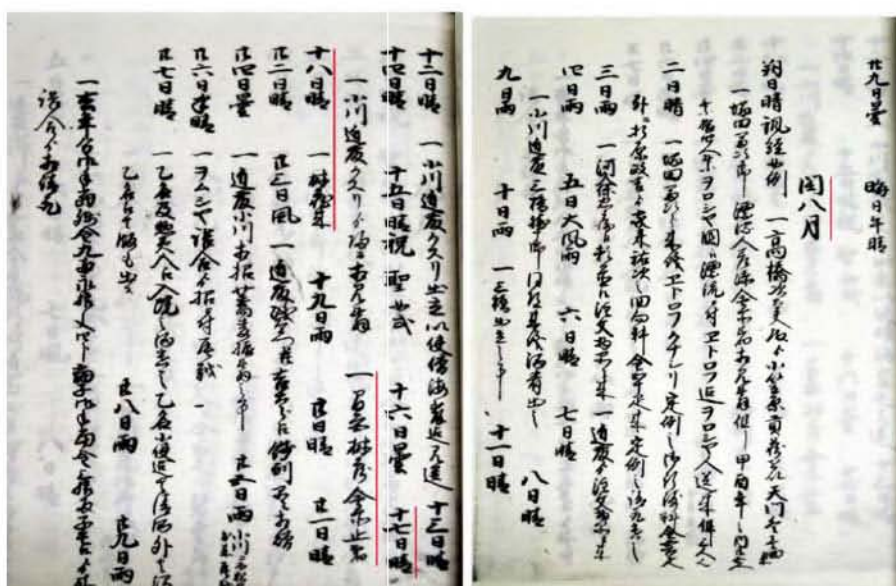
編者は、二〇一一年に「明治北海道十勝オーバル(帯広市)」で開かれた全国巡回フロア展を見た際にこの情報を知った。

以前から蝦夷地古地図については高木氏に種々教わっており、さらに井口氏や佐久間前館長の発表からも間宮の全道測量に確信を持っていたが、これはなんとしても確認しなければと、この年の九月に厚岸町に行った。

国泰寺の「日鑑記」は、全部で三六冊あり、昭和三四年に北海道指定有形文化財になっており容易に閲覧出来ないが、郷土館に写本を展示してあるとのことで厚岸町郷土館を訪ねて、写真撮影をさせて頂いたのが中段の画像である。

なお、印刷物では「新厚岸町史」資料編一「鑑記上」一一八―九頁に要約されている。

文化十三(1816)年の冊で



厚岸町郷土館展示の 国泰寺「日鑑記」写本 文化13(1816)年綴りの一部(撮影・編者)

部分は

閏8月

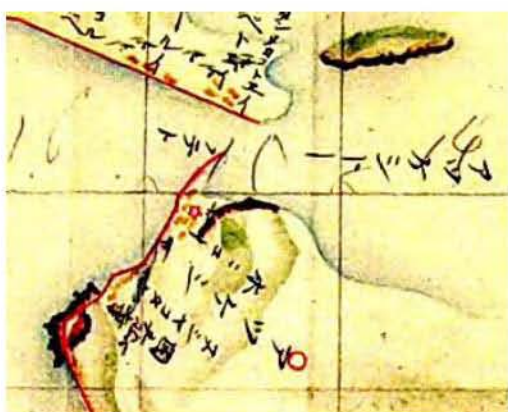
一七日晴

一間宮林蔵会所止宿

十八日晴 一林蔵来

と鮮明に読み取ることが出来る

これで、中塚氏発表宮歌村の(本誌28)「文化十(1813)年四月間宮林蔵道路測量ノタメ来村」が沿岸部測量の始期であり、国泰寺日鑑記の「林蔵の会所泊と国泰寺を通ったこと」から沿岸測量のやや終期となる文化十三(1816)年が判明したと言える。



↑上は文政大図 22号

右は寛政大図→
※国泰寺はない



謝辞

間宮伊能図の発表では、非常に沢山の方々のお世話になり有難うございました。コラムのように十数年振りの方にまで偶然お会いして、お手数をかけました。

まず会場ですが、私のマンションで、というわけにはゆかないので、忠敬に御縁が深い江東区の広報係長とか、区長秘書をしておられ、江戸博の展覧会のあるから何かとお世話になった小倉芳子さん（現在豊洲図書館）に電話したところ、二つ返事で江東文化センターの会議室を確保していただきました。有難いことです。

次は報道機関。中央紙各社からは、すぐOKをいただきましたが、今回は地図であるし、NHKはどうかな、と海保の発表のときお世話になった西川さんに、聞いて見ました。そうしたら、彼は埼玉放送局のデスクになっていて、アメリカ大図発表のとき、担当していただいた今井徹さんが遊軍のデスクになって戻ってきていますと紹介されました。これは驚きでした。9時のニュースで十分もやっていただいたのは珍しいことでした。今井さんのところの三瓶さんという方が熱心に動いていただきました。

現場での確認作業、発表会場の設営には鈴木代表、横溝さんの他に戸村さんに大変御協力いただきました。

特集号の原稿を北海道の熱心な会員数名にお願いしたところ、大量に集まり過ぎて、報道発表資料本文のスペースがなくなつたので、発表資料の共著者である鈴木代表、戸村茂昭、竹村基の諸氏に、この場を借りて御礼を申し上げます。（渡辺）

国立公文書館の奇遇

渡辺一郎

公文書館の調査に際し、2001年のアメリカ議会図書館大図発見のキツカケとなった沖縄の留学生（当時）神田（かみた）涼さんに、すっかりお世話になったから奇遇ある。

2001年ワシントンのマウントバーノン（アメリカのワシントン近郊のアレクサンドリア 近くにある、合衆国初代大統領ジョージ・ワシントンのプランテーションがあった）から、JWAと読売共催でアメリカ・ウオークが出発（隊長近藤米太郎氏）するというので、個人旅行の途中立ち寄って見送りに出た。場所を地図で調べ、アレクサンドリアから電車で出かけて、路線バスを待っていたとき、留学生の神田さんに出会った。文化財修理の実習に通っているという。マウントバーノンの話とか、議会図書館の閲覧手続きのことを聞き、メールアドレスを交換して別れた。その日はウオーク隊を見送ってホテルに帰る。

翌日、ホワイトハウス見学に並んでいて、長蛇の列に嫌気がさし、神田さんの話を思い出して、議会図書館にチャレンジしたことが、アメリカ大図発見に結びついた。

後日、アメリカ大図学術調査となったときは、神田さんにメールでお願いして一週間手伝っていた。

その神田さんに、渡辺さんですよね、と公文書館の調査で声をかけられたのでビックリした。いまは岡西さんといい、公文書館の利用係長の名刺をいただく。アメリカで・・・といわれても

思い出せなかったから申し訳ない。

アメリカ大図の話のつど、学芸員さんの就職は大変だろうな、と思っていたので、名刺を見て最初に感じたのは、いいところに職を得られて良かったな、との気持ちだった。

公文書館の史料について、私どもが発表してかまわないですか、問題ありません。

新聞に公開する写真がないので、新聞・放送に撮影させたい（発表の前に撮影会をおこなう）が出来ますか。会議室をあたります。そこを使つてください。などと、挨拶とタイミングは前後するが、メール、届書送信、許可、などテキパキと処理していただいた。

そして発表。一段落したところで、食事に誘おうと電話したところ、今日から長期休暇ですとの話し。係の人が一年間の産休と教えてくれた。おめでただった。再び、一瞬の出会いでシッカリ役割を担って頂き感謝のほかはない。

世の中はほんとに狭いと思う。忠敬さんは幸運な人だと思っているが、我が伊能関連プロジェクトも必要とき必要な人材が現れて道が開けるといふ幸運に何回も遭遇している。

アメリカ大図博物館展でも「奇跡が起こる」あきらめるな、といつも言っていた。

愛媛文化博が辞退したとき、やめようと声が上がったが、やめないと頑張っていて中日さんが熱海MOA美術館の参加を獲得して頂いた。

その流れからいくと、私の感では大河ドラマ「伊能忠敬」は奇跡的に実現し、仰天する視聴率を稼ぐと信じている。

伊能忠敬の蝦夷図についての疑問

星埜由尚

1. 疑問の所在

伊能忠敬の十次にわたる全国測量は、寛政一二(1800)年に始まり、文化十三(1816)年に終了した。そのうち第一次蝦夷地測量においては、蝦夷地を周回できず、津軽海峡北岸と厚岸近くまでの海岸線測量と東蝦夷地のアンネベツ、ニシベツにおける北極出地度の観測にとどまった。その測量成果により東蝦夷地の地図を作成し、幕府に提出した。東京国立博物館と国立公文書館には、第一次蝦夷地測量による東蝦夷地の地図が所蔵されており、それぞれ「蝦夷実測図」及び「松前距蝦夷行程測量分図」と呼ばれている。

伊能忠敬は、全国測量終了後、日本橋亀島町に地図御用所を設け、幕府に提出するべく「大日本沿海輿地全図」の制作に取り掛かり、本人没後の文政四(1821)年に、その成果は幕府に提出された。この最終成果の蝦夷図を見ると、伊能忠敬自身の測量は、いわゆる東蝦夷地即ち現在の北海道南岸部にとどまったにも拘わらず、全蝦夷地及び国後島南半部の海岸線が測量された地図となっている。

間宮林蔵との関わり

伊能忠敬が未測量として残した西蝦夷地(北海道西海岸及び北海岸)については、従来、間宮林蔵が測量し、その成果を伊能忠敬に提出したと言われていた。その根拠としては、従来の間宮林蔵研究において、間宮が蝦夷地の測量を行ったとされてい

たこと、伊能忠敬と間宮林蔵は、伊能第一次蝦夷地測量の際、函館近郊において面識を得たとされ、その後間宮林蔵は伊能忠敬に測量術を教授されたとされること、間宮林蔵が蝦夷測量を行うに当たって伊能忠敬が「贈間宮倫宗序」を間宮林蔵に与え激励したとされること、「大日本沿海輿地全図」の提出に当たつとともに提出された「輿地実測録」において、蝦夷図については間宮林蔵の測量データを使用したことが記されていることなどにより、伊能忠敬の蝦夷図は、間宮林蔵の測量データを利用して作成されたとされてきた。ただし、伊能忠敬の第一次蝦夷地測量の測量データとの関係については、伊能忠敬が未測量に終わったところのみ間宮林蔵の測量データが使われたとの認識が一般的であった。管見では、そのことに疑問を呈したのは、平成一七年に「伊能忠敬研究」第四一号において、室蘭周辺の伊能第一次測量による蝦夷図(東京国立博物館所蔵の「蝦夷実測図」と国立公文書館所蔵の「松前距蝦夷行程測量分図」)に描かれた測線と最終成果の大図(「アメリカ大図」)に描かれた測線とを比較し、東蝦夷地の測量における間宮林蔵の貢献に言及した井口利夫氏の指摘のみであった。

一方、海野一隆氏は、平成一七年に出版された「東洋地理学史研究日本篇」のなかで、これに異を唱え、間宮林蔵の伊能忠敬の蝦夷地測量における貢献を否定している。「輿地実測録」に記載されている日本海及びオホーツク海岸の天測地点六点のうちソーヤの一点にのみ間宮以外の人名が記されているほか、間宮林蔵が測つたという記録がないことが間宮の測量成果ではないことを示しているとし、間宮林蔵の測量の師であった秦櫛丸(村上島之丞)が作成した「北海道全海岸線図」の輪郭は、

「大日本沿海輿地全図」のそれと大差ないところから、伊能忠敬の蝦夷図は、間宮林蔵とは関係がなく、秦櫛丸が作成した蝦夷地図を利用したに過ぎないと結論づけている。海野一隆氏も、伊能忠敬が未測量に終わった部分の補完として秦櫛丸の成果が利用されたと考えているように見受けられる。このように、伊能忠敬の蝦夷図については、未測量の部分が誰により行われたのか、また、未測量の部分の測量データと第一次蝦夷地測量の測量データの関係をどのように考えるべきか定説には達していない状況にあった。

第一次蝦夷地測量成果と最終成果の違い

第一次蝦夷地測量終了後に作成された大図は、その測線をアメリカ議会図書館所蔵の最終成果の写本(以後「アメリカ大図」といふ)と比較すると、その測線の形状などの特徴が大きく異なることが指摘されるようになった。その嚆矢は、前述したように井口利夫氏の「伊能忠敬研究」第四一号における指摘である。その後、筆者もこのことに気づき、伊能忠敬研究会の会合等において非公式に指摘し、又伊能忠敬研究のグラビアページ「伊能図の旅」においても礼文華山道、襟裳岬、厚岸周辺等の事例を紹介してきた。

これに対し、渡辺一郎氏他は、「松前距蝦夷行程測量分図」と「アメリカ大図」の測線のデジタルデータを重ね合わせ、その結果大きなずれが生じるとして伊能忠敬の第一次蝦夷地測量の測量データは、最終成果においては使用されていないと結論づけ、伊能忠敬の蝦夷図は、間宮林蔵の測量成果によって作成されたとの報道発表を行い、マスコミ各社により取り上げられた。

以上が、伊能蝦夷図にまつわる疑問に関する研究の経緯の概要である。

2. 筆者の見解

井口利夫氏の研究

井口利夫氏は、井口利夫(2005)において、室蘭の測線について、東京国立博物館所蔵の「蝦夷実測図」及び国立公文書館所蔵の「松前距蝦夷行程測量分図」と「アメリカ大図」とを実証的に比較検討している。室蘭においては、両図において採用された測線は、全く異なることを指摘し、「アメリカ大図」の測線は、間宮林蔵の測量によるものであるとしている。室蘭以外の地における測線の違いも指摘しているが、第一次蝦夷地測量の往路と復路の異なる測量データが存在する可能性もあるとして、「アメリカ大図」の測線は、すべて間宮林蔵の測量によるとの結論は避けている。

筆者は、井口利夫氏の研究成果はきわめて適切なものであると考えるが、伊能忠敬が第一次蝦夷地測量において室蘭以外に往路と復路で異なる測線を測量した可能性はきわめて低いと思われる。

伊能第一次蝦夷地測量は、冬の到来による極めて制約された日程のもとで行われており、復路に測量を行う余裕はほとんどなかったと考えられるからである。室蘭では、エトモから海路を急ぐことを計画したため、復路エトモまで測量する機会を得たのではないだろうか。また、往復ともに測量を行ったのであれば、「松前距蝦夷行程測量分図」等に往路と復路の測線が描画されているはずである。また、最終成果においても往復の測線が描かれるであろう。また、井口利夫氏は、第一次

蝦夷地測量成果と最終成果との地名記載数の違いを述べ、最終成果に記載される地名が間宮林蔵の測量によるものであるのか、あるいは、第一次蝦夷地測量による地名をその成果には全て記載しなかったのかと二説を併記している。筆者は、最終成果に記載されている地名が第一次測量によるものであるとするならば、第一次測量成果に当然記載するのが常識的判断であると思われる、最終成果に記載されている地名は、伊能忠敬以外の測量によるものと考ええる。

室蘭以外についても井口利夫氏は言及し、第一次蝦夷地測量において不測量の部分においても最終成果では海岸線に沿う測線が延ばされ、間宮林蔵の成果が織り込まれていると述べている。また、第一次蝦夷地測量成果と最終成果の測線には、他の部分においても違いが見られるが、第一次蝦夷地測量において往路と復路に異なる測線があった可能性を捨てきれないとして、最終成果は「間宮図」であるとの結論には、慎重な姿勢を貫いている。筆者も、礼文華山道、襟裳岬および厚岸周辺について「松前距蝦夷行程測量分図」と「アメリカ大図」とを比較してみたが、明らかに測線の形状や地名の記載が異なっている。これらについては、前述の通り、本誌「伊能図の旅」の中で簡単に述べている。

渡辺一郎氏他による「松前距蝦夷行程測量分図」と「アメリカ大図」の測線の重ね合わせ

一方、渡辺一郎氏他は、「松前距蝦夷行程測量分図」と「アメリカ大図」の測線を重ね合わせ、そのずれから「松前距蝦夷行程測量分図」と「アメリカ大図」の測線は異なる測量の成果であり、「ア

メリカ大図」は間宮林蔵の測量成果に基づくものである可能性が極めて高いと結論づけている。筆者は、この結論については同様の考えを持っているが、その手法には若干の疑問がある。渡辺一郎氏他の研究については、報道発表資料のみで詳しい論文資料がないため詳細については不明であるが、いくつかの疑問を指摘しておきたい。

第一に、「松前距蝦夷行程測量分図」と「アメリカ大図」に描かれた測線の同一場所の有無が不明確である。伊能測量当時、現代測量には必須の基準点が存在しなかった。「松前距蝦夷行程測量分図」と「アメリカ大図」には、基準点は描かれていない。伊能忠敬は、後の測量においては、測量隊を二分三分し、測線をつないでいったので、測点に杭を打ち名前をつけているが、蝦夷地測量ではそのようなことは行っていない。従って、「松前距蝦夷行程測量分図」と「アメリカ大図」の重ね合わせにおいて同一点を決めることは困難である。そのため、同一点はそれらしきところを仮定して両図を重ね合わせることになるが、同一点はできるだけ多数設定し、幾何補正の必要が生じる。国土地理院の二万五千分一地形図等に両図を重ね、同一点を地形図上で同定し、幾何補正を加えて測線を補正して、両図の測線の経路を判定し、差異を論じるべきである。

第二に、測量データを地図に展開する手法については、弟子の渡辺愼による「伊能東河先生流量地伝習録」に簡単に述べられているのみで、詳細については不明であるのが現状である。従って、「松前距蝦夷行程測量分図」等にもみる図化の手法と最終成果における図化の手法との違いの有無について論じることは困難である。足かけ一七七年を

要した伊能測量は、図化の手法を含めて回を重ねるごとに経験を積み創意工夫も行われ進歩していったはずであり、「松前距蝦夷行程測量分図」と最終成果とは、図化の手法も異なっていたと考えるのが常識的には妥当であろう。図化の手法が異なっていたとすれば、重ね合わせて比較することにより異なる測量成果であると断言することは困難である。また、「アメリカ大図」は、最終成果を写したものである以上、最終成果との厳密な比較とはならないことも考慮に入れなければならない。

さらに、「松前距蝦夷行程測量分図」と「アメリカ大図」の描かれた紙の伸縮、模写の際の誤り、精度の劣化などがあるはずで単純に重ね合わせることは疑問がある。しかしながら、問題点があるとはいえ、一つの参考資料として重ね合わせ、「松前距蝦夷行程測量分図」と「アメリカ大図」との測線は全体として大きく異なり、異なる測量のものである蓋然性が高いとする根拠の一つとして意味があると考えられる。

このように、「松前距蝦夷行程測量分図」と「アメリカ大図」との測線は異なる測量の成果である可能性は高いと考えられるが、更なる検討のためには、両図を基準となる地形図(例えば国土地理院地形図)に精度検証しつつ落とし込み、幾何補正などを加えて比較することと、井口利夫氏の行ったような測線の詳細な比較即ち「松前距蝦夷行程測量分図」と「アメリカ大図」との測線の形状、表記されている地名、天測地点の北極出地度数値を含めた比較検討、測量日記などの記録の検討をさらに行うべきであると考ええる。

海野一隆氏の秦檣丸説

「松前距蝦夷行程測量分図」と「アメリカ大図」

との測線は、異なる測量の成果である可能性は高いものとして、最終成果の測線は誰の測量によるものであろうか。前述したように、海野一隆氏は、伊能蝦夷図には間宮林蔵との関わりはなく、秦檣丸の作成による「北海道全海岸線図」を写したものが伊能蝦夷図であると述べている。海野一隆氏の言う「北海道全海岸線図」とは、海野氏論文の文脈から文化三年作成の「蝦夷地図」(国立史料館所蔵であると思われるが、伊能測量前後の蝦夷図を見ると、近藤重蔵の享和二年(1803)「蝦夷地図式 乾」、秦檣丸の文化五年(1809)の「蝦夷地地図」、岡部牧太の文化三年(1806)「松前絵図」等が注目される。これらの蝦夷図は、一見して蝦夷地の地形が現在の北海道の地形に極めて近く、当時の他の蝦夷図と比べその精度が突出して高い。これらの地図を伊能蝦夷図の中図・小図と比較するとその海岸線は極めて類似する。近藤重蔵の蝦夷地調査には、秦檣丸が部下として同行していた。文化五年(1809)の「蝦夷地地図」は、蝦夷地が東西に若干寸詰まりになった形に描かれているが、これは、作図又は写図の際に長さの取り方を誤ったのではない。いずれにしても、秦檣丸の測量技術は高く、伊能蝦夷図の完成前に伊能中図又は小図の水準と甲乙つけがたい蝦夷図を作成したといえるであろう。このような蝦夷図が伊能測量完了前に突如現れたことは不思議である。高木崇世氏も秦檣丸の存在の大きいことを述べている。いずれにしても、今後の蝦夷図研究の一つの大きな課題ではないかと思われる。

しかし、秦檣丸が作成した蝦夷図は、小縮尺であり、測量と図化の手法については、全くわからない。また、伊能蝦夷図に必須の測線は描かれて

おらず、海岸線の形状は、細かく見ると河口の凹凸が多くやや絵画的である。従って、海野一隆氏の所論のように、伊能蝦夷図の伊能未測量部分は、秦檣丸が作成した蝦夷図を利用したとの結論を得るには、秦檣丸の測量記録などが明らかにならないう限り困難であると言わざるを得ない。

伊能蝦夷図の最終成果は、誰の測量によるものか

最終成果伊能図のうち、第一次蝦夷地測量による松前からニシベツまでの東蝦夷地は、誰の測量成果に基づくものであろうか。伊能忠敬は、第一次蝦夷地測量において、東蝦夷地の測量を行い、その成果により蝦夷図を作成していることから、当然第一次蝦夷地測量成果に基づくものであると考えられていた。しかし、第一次蝦夷地測量成果による「松前距蝦夷行程測量分図」と最終成果の写本である「アメリカ大図」とを比較すると、前述したようにその測線には大きな違いが見られる。

「松前距蝦夷行程測量分図」の測線は、測線の単位が全般的に細かいのに対し、「アメリカ大図」の測線は、測線が直線的でその単位が長い印象を受ける。歩測により距離測定が行われた第一次蝦夷地測量では測線の単位は短くなるであろう。「アメリカ大図」に描かれている測線が別の測量であるとすれば、間縄等で距離を測ったであろうから、測点相互を見通せば長い距離をとって測量したであろう。このようなことが、両図における測線の形状の違いにも反映されていると考えられる。「アメリカ大図」においては、東蝦夷地と西蝦夷地でのような傾向に変わりが無い。

伊能測量においては、測量の基準点を設置して

いないので、東蝦夷地における第一次蝦夷地測量の測量データと西蝦夷地の異なる測量データとを接合することは理論的には不可能である。また、伊能忠敬は、第一次蝦夷地測量の精度が悪いことはよくわかっており、測量日記の記載にもそのことが記されている。また、第二次測量において西蝦夷の測量を要望していたことも明らかである。

推測に過ぎないが、伊能忠敬は、自らの不測量と測量の不出来とを自覚し、それを補うため、間宮林蔵の蝦夷地測量に相当期待し、だからこそ激励の序を与えたのではなからうか。伊能忠敬は、測量技術者として、異なる測量のデータを混合して図化するようなことはできなかったと考えるべきであろう。筆者は、ここに伊能忠敬の測量家としての矜持を見る。自らの測量データを捨て、間宮林蔵によるものであろう測量データを用いて蝦夷図を作成したのであろう。第一次蝦夷地測量において襟裳岬のサルル山道を越えて測量したことは、測量日記から明らかであり、「松前距蝦夷行程測量分図」においてもサルル山道の測線が描かれているが、最終成果においては、サルル山道の測線は全く描かれていない。このことがすべてを表していると言っても過言ではない。

「松前距蝦夷行程測量分図」と「アメリカ大図」の地名、測線を個々の区域において比較検討することにより、伊能蝦夷図は間宮林蔵の測量結果であったと断言はできないが、その可能性をより高めた議論ができるものとする。結論的に言えば、最終成果蝦夷図は、基本的に間宮林蔵の測量成果により制作された可能性が高い。これが筆者の見解である。

筆者が古地図特に伊能図に興味を持つようになったのは、国土地理院職員としての勤務を終える数年前からであった。伊能忠敬研究会の諸兄姉に触発され、伊能忠敬に関わって以来、ようやく十年を越した程度の浅学非才の身で、このような大きなテーマを論じるのに躊躇し、内容も途中で変更してようやく脱稿したのが本文である。

数年前、たまたま平成十五年に東京国立博物館で開催された「伊能忠敬と日本図」展の図録を眺めていたときに、室蘭周辺の第一次測量の測線が最終成果の模写本「アメリカ大図」の測線と異なることに気づき、東蝦夷地の他の部分ではどうだろうかと疑問を持った。国立公文書館のホームページに「松前距蝦夷行程測量分図」の高精細画像が公開されていることも知り、いろいろ調べるうちに本誌第四一号に既に井口氏の論文が出ていることを知った。灯台もと暗しで誠にお恥ずかしい次第である。井口氏の論文に気づくまで、「伊能大図総覧」の刊行があったが、井口氏の論文はこれには全く反映されていない。また、「伊能大図総覧」刊行を機に本誌に「伊能大図総覧の地名と景観」の標題で室蘭の図についても解説したが、そこにも井口氏の論文を引用することができず、矛盾ある記載となってしまう。筆者の不勉強により、このほかにも不適当、不適切な表現がどこかに存在するかも知れない。不明を恥じるとともに、井口氏ほか関係者・読者にお詫びする次第である。

本文についても古地図に造詣の深い方、とりわけ蝦夷図を長く研究されている方々、また、北海道在住の郷土史等に明るい方々などからみれば、誤り、誤解、見落とし等数々の不備な点があると思うが、ご指摘を賜りたい。

引用・参考文献

井口利夫(2005)

間宮林蔵の東蝦夷地測量

文政上呈図にその足跡を探す

伊能忠敬研究 第41号 46-53

海野一隆(2005)

東洋地理学史研究

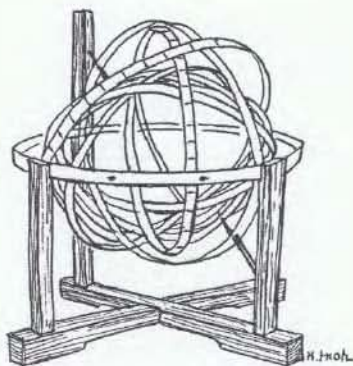
日本篇 546-555 清文堂

高木崇世(2011) 近世日本の北方図研究

326pp 北海道出版企画センター

成田修一(1989)

蝦夷地図抄 257pp 沙羅書房



渾天儀

伊能忠敬相浦地区測量二百年記念文碑 設立の意義とその経緯

佐世保市 平川定美

一 その意義

① 七十は近き春にぞ相浦

九十九島をいきの松原

二百年前の伊能忠敬は、この相浦地区の「内山六右衛門」宅で越年し、古稀の正月を迎えた慶びと、これからの測量に対する覚悟と意気込みの程を、冒頭の歌に託した。

全国測量第八次・九州での測量第二次のこの相浦地区測量は、寛政十二年（一八〇〇年）四月十九日、深川八幡宮に詣でて、蝦夷地測量へと出発してから、ちょうど十三年目（文化十年・一八一三年）の古稀を迎えた正月とあって、感慨ひとしおであったであろう。

おそらく、生涯忘れることのできない印象の深い地域であったに相違いない。

この件に関しては、十四・五年前、NHK「その時歴史は動いた」の番組で、「伊能忠敬五十六歳からの挑戦」と銘打って、冒頭の歌とともに、相浦・九十九島が紹介された経緯がある。

② 正月を迎えた伊能測量隊は、いよいよ四日よりみぞれ降り、雪降る酷寒の季節に、星の如く散りばめられた島々を、そして出入りのはげしい入江・岬を、果敢に、しかも逐次丹念に測量したのである。

この困難な測量地域を、苦難をいとわず、驚くべき気力と忍耐力とをもって立ちむかった測量隊、卓越した忠敬の統率力とが相まって、この大事業

をなしとげた二百年の彼らの勇姿に思いを馳せるとき、私たち地域住民にとつても、畏敬・称賛の念とともに、親しみと誇りさえ覚えるものである。

③ 「九十九島」の地名の起源は定かでないが、一つ一つの島を測量し、明確に、「九十九島」の名を名実ともに世に知らしめたのは、伊能忠敬ではないか。

言わば、忠敬は、九十九島を広く世の人々に知らしめた先達者である。

以上の観点から顕彰すべく、この測量地域相浦に是非伊能碑設立をと決意した次第である。

二 その経緯

① 伊能忠敬への関心

おおよそ四十年前程前の昭和四十七年頃、故吉富一氏（元長崎県立佐世保高校教諭）の「伊能忠敬の佐世保測量」（佐世保近郊の地形と人生所収）の中の測量日記「右二鎮守八幡社字折橋、枝横尾、佐世保川中十二間、左二春日社（棒線筆者）」の記事を目にし、わが宅より百メートルもない、ほんの身近な春日神社の前を、あの伊能測量隊（一九名）が通ったことを知り、驚愕、感動とともに、妙な親近感を覚え、関心を深めるきっかけとなった。② 執筆・発表

学校教師（中学）を退職した平成のはじめに、佐世保史談会に加入し、その機関誌「談林」に、「伊能忠敬と西海路」第34号、「佐世保における伊能忠敬」第42号・43号、「伊能測量隊、佐世保をまかり通る」第50号等投稿し、研究発表としても佐世保史談会や、他の団体も含めて、十二・三回に及ぶ。

この経過の中で、伊能忠敬の子弟等が、次々と

「シーボルト事件」に連座した事を知り、「シーボルト事件とその後」と題し、五回にわたり「談林」に連載した経緯がある。

③ 設立への構想

前述したように、伊能忠敬への関心は、執筆・発表と具現化するなかで、伊能碑設立の意義も練り深められ、次第に設立実現への願望をふくらませていった。

それをより増加させたのが、伊能測量隊止宿本陣たる「内山六右衛門」宅の屋敷及び、その直系の「内山大輔氏」の確認である。

④ 伊能碑設立までの経緯と概要

地区の坂本陽一郎氏（不動産）に会い、伊能碑設立構想を伝える。

内山大輔氏を訪ねる。かつての屋敷が、相浦郵便局と、その横の駐車場を含む広い地域であったことを知る。当然ながら、その屋敷内に設立したい意向を伝えるも、諸事情により不可能であることを告知される。

坂本陽一郎氏の紹介により、それら地域の方々と「ひまわり不動産」の事務所をお借りして、伊能碑候補地について協議する。

それら協議した方々に対し、さらに協力をお願いすべく、その趣旨を手紙でしたためお伝えする。

坂本陽一郎氏宅にて、設立の基本線について意見交換

「設立趣意書」作成にとりかかり、幾度も私的な会合をもち、三月半ばに

年	月	日	事項
24	1	11	地区の坂本陽一郎氏（不動産）に会い、伊能碑設立構想を伝える。
24	3	8	内山大輔氏を訪ねる。かつての屋敷が、相浦郵便局と、その横の駐車場を含む広い地域であったことを知る。当然ながら、その屋敷内に設立したい意向を伝えるも、諸事情により不可能であることを告知される。
24	3	20	坂本陽一郎氏の紹介により、それら地域の方々と「ひまわり不動産」の事務所をお借りして、伊能碑候補地について協議する。
24	3	30	それら協議した方々に対し、さらに協力をお願いすべく、その趣旨を手紙でしたためお伝えする。
25	1	15	坂本陽一郎氏宅にて、設立の基本線について意見交換
25	2		「設立趣意書」作成にとりかかり、幾度も私的な会合をもち、三月半ばに

四 「伊能忠敬相浦地区測量二百年記念之碑」の概要

- ① 設置場所 長崎県佐世保市相浦町三十二番三十三号(図1)
- ② 設置日 平成二十六年(二〇一四年)五月九日(金)



図1 伊能碑の位置

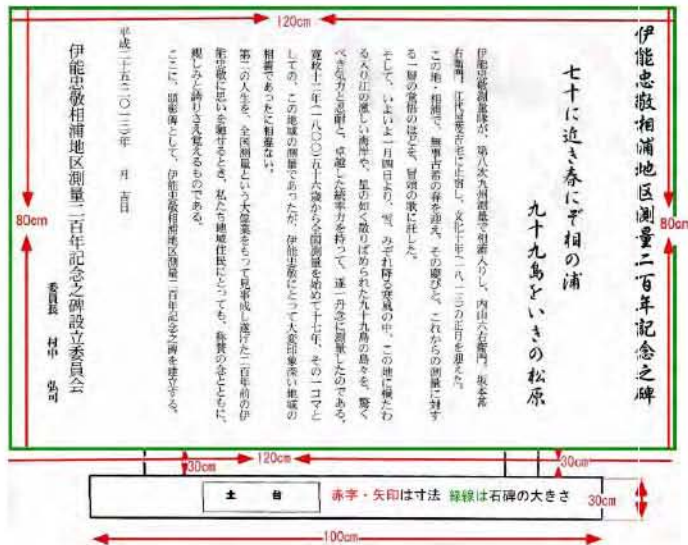


図2 記念碑の形・寸法(当初のイメージ図)

- ③ 設置主体 伊能忠敬相浦地区測量二百年記念之碑設立委員会(資料1)
- ④ 記念之碑の規模(図2)
 - ・横巾一m二十cm
 - ・奥行き二十cm
 - ・高さ一m四十cm
 - ・数量二十五m
- ⑤ 碑文(資料2)
- ⑥ 記念之碑の全体像(写真1・2)
- ⑦ 除幕式光景(写真3)
- ⑧ 記念之碑設立及び除幕式に対する報道の一例(写真4)

資料1

伊能忠敬相浦地区測量二百年記念之碑設立委員会	
発起人	平川 定美
委員長	村中 弘司
副委員長	内野 信幸
委員	坂本陽一郎
委員	澤 正明
委員	山口 賢一
委員	吉田 光久
委員	中島 眞澄

資料2

伊能忠敬相浦地区測量二百年記念碑
七十に近き春にぞ相の浦
九十九島をいきの松原

伊能忠敬測量隊が第八次の九州測量で相浦入りし文化十年(一八一三)の正月を迎えた。

この地・相浦で無事古希の春を迎えこれからの測量に対する一層の覚悟のほどを冒頭の歌に託した。

そしていよいよ一月四日より入江の激しい海岸や九十九島の島々を逐一丹念に測量したのである。

五十六歳から全国測量を始めて十七年、その一つとしてのこの地域の測量ではあつたが、伊能忠敬にとって大変印象深い地域の相浦であつた。

第二の人生を全国測量という大偉業をもつて見事成し遂げた二百年前の伊能忠敬に思いを馳せるとき、私たち地域住民にとっても、称賛の念とともに親しみと誇りさえ覚えるものである。

ここに顕彰碑として伊能忠敬相浦地区測量二百年記念碑を建立する。

平成十六(二〇一四)年四月吉日

伊能忠敬相浦地区測量二百年記念之碑設立委員会
委員長 村中 弘司



写真2 伊能碑全体像(裏:協賛団体名・設立委員会)



写真1 伊能碑全体像(表の碑文)



↑ 写真3 除幕式光景

← 写真4 除幕式及び記念之碑に関する報道の一例
(2014年5月10日付西日本新聞)



図3 伊能忠敬の測量地図(伊能図) 相浦地区の一例 (平戸松浦史料博物館蔵)

五 伊能忠敬相浦測量の足跡

①「測量日記」のひとこま

一月七日 朝曇晴風、五ツ後微雪、夜雲深更雪、船越逗留測、相神浦村字大浦(大)印より始、小松島に至十二町三十間、瀬戸中二十四間、トシヤク島周二十間斗。それより①印を残迄一町六門、マノカ島へ渡、瀬戸中四十二間、マノカ島一周一町四十四間、右島へシヨウノ島へ繋、瀬戸中二十八間五尺、同島より瀬戸中八間、小マノカ島へ渡一町四十間斗、・・・以下略

(傍点筆者)



图5 相浦地区測量行程图

『伊能忠敬測量日記』第4巻(佐久間達夫校訂・大空社刊)、『伊能忠敬長崎県測量日記編及び地図編(入江正利氏作成)、『佐世保市小学地図』(佐世保強度研究所)を参照して作成

③相浦地区測量行程図(図5)

年・月・日	宿泊地	宿 泊 宅
文化9・12・7	宮 村	堀原貞右衛門・西蓮寺
12・8～10	早 岐	福田利一郎・村山紋十郎
12・11～16	針 尾	豊村常左衛門・楠本文助
12・17～22	早 岐	福田利一郎・村山紋十郎
12・23	佐世保	平田密左衛門・富田四郎右衛門 村田頼右衛門・茶屋長三郎
12・24～27	佐世保	長島市郎右衛門・内山密右衛門 大久保愛之助・白川大藏
12・25	佐 浦	湯浅喜惣右衛門・南部波左衛門
文化9・12・28～ 文化10・1・4	相神浦 (銭の浦)	内山六右衛門・坂本基右衛門 江代屋茂吉
1・5～8	給 越	八郎右衛門
1・9～10	相神浦 (銭の浦)	内山六右衛門・坂本基右衛門 江代屋茂吉
文化10・1・7～9	日 野	山口平左衛門・吉田平藏
1・10～11	相神浦	内山六右衛門・坂本基右衛門 江代屋茂吉
1・12～13	大別当	谷村三右衛門
1・14～15	相神浦	内山六右衛門・坂本基右衛門 江代屋茂吉
1・16	古 川	石田平太郎
1・17～18	長坂浦	山本屋庄助・山本屋喜兵衛
1・12・13	九艘泊	浜田諸左衛門
1・17	九艘泊	浜田諸左衛門
1・18	高 島	未次五十次
1・19～24	九艘泊	浜田諸左衛門・光福寺
1・25・26	矢岳浦	伝之丞
2・8・9	黒 島	平山要助・黒島山興禅寺

图4 佐世保地区宿泊地・宿泊宅表

□内は相浦地区測量関係止宿(「伊能忠敬測量日記」
(長崎県関係)を参照して作成)

②佐世保地区宿泊地・宿泊宅表(図4)

かわら版 ミニ発見情報 高橋景保書簡から

内弟子（後に天文方下役）門谷清次郎は絵師だった

伊能隊は測量作業と並行して沿道風景図をスケッチしておき、地図にとりまとめる際、その取り置きしたスケッチを参考にしたことは、よく知られている。

では、誰が絵師だったか。天文方下役（諸組同心の出向が多い）の青木勝次郎が絵師だったことは分かっているが、彼は第6次と第7次測量のみに従事している。

事務所で武田氏寄贈の「天文曆学諸家書簡集、上原久、小野文雄、広瀬秀雄編、講談社刊」を眺めていたところ、文化四年正月二日付 景保から忠敬への書簡があつて(105a)、その中に「絵図の写を市野金助に頼んだが、絵図のなかに絵画があり、画工でないと筆写できないといわれた。むりにとはいわないが、門弟の門谷清次郎を二日間貸してほしい。9尺の絵図盤も貸してほしい・・・」という記事を見つけた。

門谷は絵師だった。第5次測量では内弟子として測量に従い、第8次では下役として従事した。

これで、第5次から第8次まで絵画担当はスツキリとつながる。地元の絵師が長期に随従した例（第7次）はあるが、伊能隊側に風景の担当者がいた筈だと思っていたが、これでスツキリした。

また、どういう構造か分からないが9尺の絵圓盤というものが、地図書き込みに使われていたことがわかる。

(I・W)

伊能忠敬旧宅大修復なる

伊能 洋

先の会誌74号に忠敬旧宅修復の第一報を入れましたが、十一月末、オープン後に再度取材して参りましたので、さらに詳細をお目につけたく頁を頂きました。香取市の大事業として、三年七ヶ月に及ぶ土台からの大修復は見事なもので、私のように旧宅に住んで古い家の状態を知悉しているものでも、よくこれだけ生き生きと復元されたと驚いていたほどです。

店舗、書斎、台所、文庫蔵など、それぞれに丁寧な説明パネルも完備されていました。是非また見に来ていただきたいと思いますが、まずは写真でご報告申し上げます。



店舗正面



店舗内部



店舗奥居間



旧宅と小野川面



書斎南側



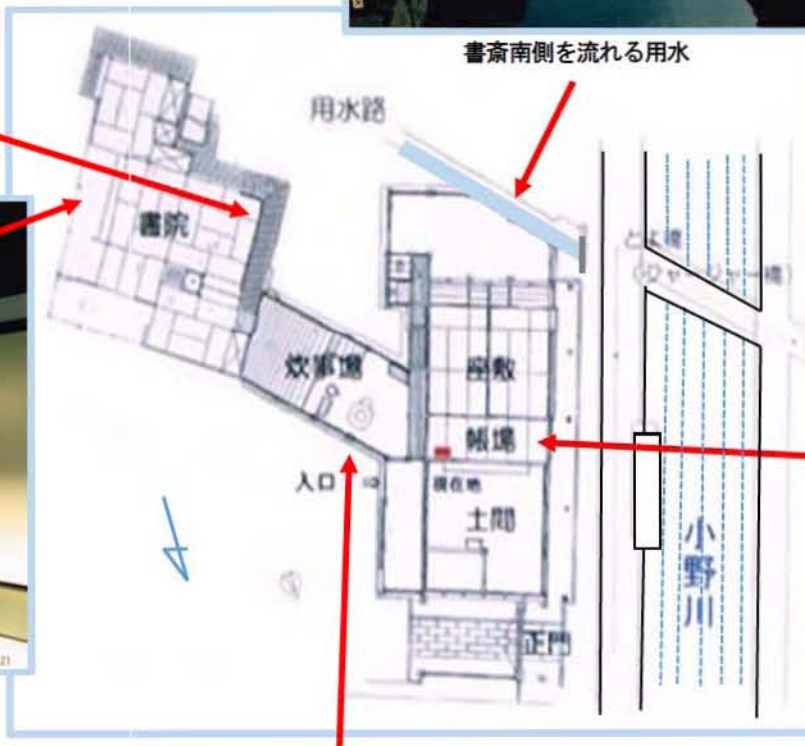
書斎西側



書斎南側を流れる用水



書斎北側居間



土蔵



台所

震災復旧なる
真新し忠敬書斎の白障子
小春日や忠敬旧居子ら溢る

” 洋

伊能忠敬没後二百年記念誌発行に向けて

各地の記念碑・標柱等紹介（四）

二〇一三年秋より、全国の市町村『伊能忠敬測量日記』中の宿泊地）に、伊能忠敬関係の記念碑・案内板・標柱・史料・文献・宿所情報などを問う調査書を送り、多大なるご協力をいただけてきました。厚くお礼を申し上げます。

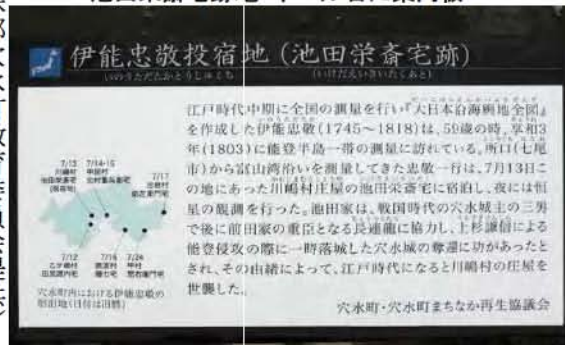
記念誌には、すべての記念碑・案内板・標柱等を一覧表にして掲載する予定ですが、写真は一部掲載になります。そこで、会報に随時紹介することとしました。旅行や仕事で現地にお出掛けの際は、是非とも訪ねてみてください。

一、石川県鳳珠郡穴水町

- ①名称 「伊能忠敬投宿地（池田栄斎宅跡）」
- ②説明文 「江戸時代中期に全国の測量を行い『大日本沿海輿地全図』を作成した伊能忠敬（一七四五～一八一八）は、五九歳の時、享和三年（一八〇三）に能登半島一帯の測量に訪れている。所口（七尾市）から富山湾沿いを測量してきた忠敬一行は、七月十三日この地にあった川嶋村庄屋の池田栄斎宅に宿泊し、夜には恒星の観測を行った。池田家は、戦国時代の穴水城主の三男で後に前田家の重臣となる長連龍に協力し、上杉謙信による能登侵攻の際に一時落城した穴水城の奪還に功があったとされ、その由緒によって、江戸時代になると川嶋村の庄屋を世襲した。
- ③設置場所 石川県鳳珠郡穴水町川島（商店街通り）
- ④設置年月日 平成二十四年十二月十二日
- ⑤設置者・設置団体 穴水町・穴水町まちなか再生協議会



池田栄斎宅跡地：ポール右に案内板



穴水町内の全宿泊地が紹介されている

- ⑥設置の背景・経緯 能登半島地震からの復興を目的に、商店街の賑わいの創出、個性ある公共物のデザインや住民主体のソフト施策について協議する穴水町まちなか再生協議会の中で提案され作製されたもの。
- ⑦見学の可否 随時可能

（石川県鳳珠郡穴水町教育委員会提供）

※能登半島地震 二〇〇七年（平成十九）三月二十五日午前九時四十二分頃、石川県輪島市南西沖約三十kmの日本海で発生した、マグニチュード六・九、震度六強の地震。能登有料道路（金沢―穴水 現のと里山海道）が八カ所崩壊し、輪島市・七尾市・穴水町に被害が集中した。

※大相撲の人気力士遠藤関は穴水町出身である。

二、福島県耶麻郡北塩原村

二〇一四年九月二十七日正午頃に発生した、長野・岐阜県境に位置する御嶽山（標高3,067m）の噴

火は、死者・行方不明者六十三名の惨事となったのは記憶に新しいところである。

そのニュースの直後にいただいた福島県北塩原村の二枚の案内板に記された事実も、日本の火山噴火史上、驚くべきものであった。今から百二十七年前の明治二十一年（一八八八）七月十五日に発生した磐梯山の噴火によって、伊能忠敬隊が測量した街道と宿泊した宿場そのものが消滅していたのである。

（一）会津・米沢街道と大塩宿

- ①名称 案内板「会津・米沢街道と大塩宿」
- ②碑文・説明文等 「米沢街道を歩いた歴史上の人物 ◇伊能忠敬 十七年をかけて全国を測量し、文化十三年（一八一六）に『大日本沿海輿地全図』を完成させた測量家。享和二年（一八〇二）七月二日に大塩宿に宿泊。三日、街道の途中にある萱峠茶屋で郷里の佐原より湯殿山詣での一出行に出会い、郷里の千葉県佐原出身者に書簡を届けるように頼んでいます。その日は松原の検断屋敷（松原歴史館）に宿泊しています。」
- ③設置場所 北塩原村大字大塩字湯の上 4628-1
- ④設置年月日 平成二十四年
- ⑤設置者 北塩原村教育委員会
- ⑥設置の背景・経緯 旧会津・米沢街道沿いの歴史を知る説明看板として。
- ⑦見学の可否 随時可能

※案内板には、新島八重、新島襄、吉田松陰、土方歳三なども往来したことが記されている。



(2) 北塩原村史跡 松原宿跡

①名称 案内板「北塩原村史跡 松原宿跡」

②碑文・説明文等 「この集落五一戸は、明治二十一年（一八八八）七月十五日の磐梯山爆発によって生じた松原湖の湖底に没しました。集落北戸山麓に位置した鎮守 山神社が残り、水中に鳥居が立ちます。村人は現松原集落などに移り、その参道入口にあった灯籠を移しました。この五輪塔も渇水時に湖底の墓地から移したものです。」

（中略）

松原村は、上杉景勝領となった慶長三年（一五九八）頃に宿駅となっていました（東大架蔵今井文書）。享和二年（一八〇二）七月、ここに一泊した伊能忠敬はその日記に、「此村ハ溪間ニて田畑なし。若松城下へ梶其外挽物の下地をなして家業とす。一同家作よし。泊屋も余程あり」と書いています。」

③設置場所 北塩原村大字松原字道前原 1131

④設置年月日 平成二十一年五月二十九日

⑤設置者 北塩原村教育委員会

⑥設置の背景・経緯 旧会津・米沢街道沿いの歴史を知る説明看板として。

⑦見学の可否 随時可能

（福島県耶麻郡北塩原村教育委員会教育課提供）



磐梯山の噴火と松原村の水没

明治二十一年（一八八八）七月十五日、会津磐梯山が噴火。山頂部分での噴火は十数回に及び、最後の噴火で山体が崩壊した。大量の岩石、土砂が時速八十kmを越す爆風に乘って流れくだって北麓の谷を埋め尽くし、五百人以上の死者が出たという。さらに、この崩壊によって長瀬川とそれに注いでいた中津川、小野川などが堰き止められて、松原湖、秋元湖、小野川湖などの湖沼が形成され、松原宿と会津・米沢街道の一部が水没した。

案内板の地図部分を拡大してみた。伊能大図（松原―アララギ峠）と見比べてみてほしい。案内板地図の松原湖上の赤点線が、水没した当時の会津・米沢街道である。ここに松原宿があった。それに對して、伊能大図では湖は存在せず、測線は單純に陸路をたどっている。



松原宿

（全国巡回フロア展 in 金沢工業大学）

噴火によって生まれた大小二百余りの湖沼群の中で最大の湖が松原湖である。周遊道路があり、車で一周できる。周辺は、登山・トレッキング・サイクリング・キャンプ・釣りなど四季折々のアウトドアレジャーが楽しめる観光スポットとなっている。

しかし、その湖底には、会津塗の梶を挽く木地師たちが住まいし、出羽三山詣での旅人が行きかう宿場があったのだ。時に辛口の忠敬だが、松原村については、「一同家作よし。泊屋も余程あり」と記している。宿所となった問屋嘉兵衛も漆梶の木地師だったという。

山際にあった「山神社」は水没をまぬがれ、今も当時と同じ場所に鎮座するが、水没した一の鳥居や参道の杉並木（根元部分が残る）は湖水水位の変動により、湖面に顔を出すことがあるという。松原湖は下流で水力発電をしているダム湖の一面を持っており、水は農業にも使用されているので、概ね五月の田植え時期に水位が高く、冬季は湖面の結氷もあって、最も水位が低くなる。その高低差は約二メートルにも及ぶ。

六月半ばには、「北塩原村 会津米沢街道歴史ウ

オーク」という催しがある。「伊能忠敬も歩いた街道です。よろしければ、是非！」と、教育委員会の布尾さんからお誘いを受けた。

(塩原村教育委員会、ウィキペディア 松原湖より)



二の鳥居の向こうに水没した一の鳥居の笠木が見える



湖面に現れた鳥居と参道(福島県耶麻郡北塩原村教育委員会提供)



松原湖と山体崩壊した磐梯山(北塩原村ホームページより)

三、高知県香南市
①名称 「伊能忠敬緯度観測記念碑 北緯三十三度三十三分」
②説明板 「文化五年(一八〇八)、幕府天文方一行の測量により、北緯三十三度三十三分の位置

に杭が打たれたが、後年帝国陸軍の測量で確認され、御影石に改められた。戦後の舗装工事の際、小松邸角にあった石は、放棄されたい。ちなみに高知市江の口川下流域に、 33° 度 $33'$ 秒の標識が浮かんでいる。」

③設置場所 高知県香南市赤岡町 770-2 先

④設置年月日 二〇〇七年十月

⑤設置者 香南市

⑥設置の背景・経緯 幕府の命を受けた伊能忠敬は文化五年に土佐に入り、四月二七日に赤岡浦の実測が行われ、この地を北緯三十三度三十三分と測量した。これを記念し、観測記念碑が建てられた。

⑦見学の可否 随時可能



観測記念碑と説明板

あとがき

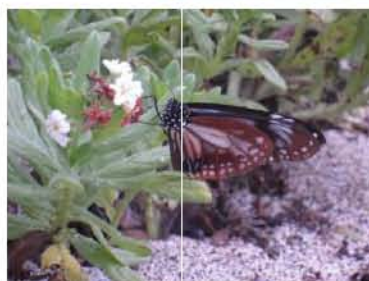
一月十一日放送の「ダーウィンの来た！」を見ていて驚いた。日本列島二千キロを縦断して台湾までも旅する渡り蝶アサギマダラの一大飛来地が、

(高知県香南市教育委員会提供)

この欄で紹介した裏磐梯の北塩原村だったのだ。羽に印をつけて放す「マーキング調査」という地道な研究で、謎だらけの渡りの様子が次第に分かってきた。村には、毎年八月に観察会を催すホテルもある。この蝶、私の出身地の海岸にもスナビキソウの蜜を求めて飛来する。忠敬さんどこかの海岸で出会ったのでは？



「ダーウィン」マークの付いたアサギマダラ



珠洲市狼煙海岸のアサギマダラ (河崎撮影)

友人からの年賀状に「M市にも伊能忠敬の碑が建ちました。壮大なロマンを感じます。」とあった。一昨年末にM市に問い合わせた時には、「記念碑・案内板等なし」と回答いただいた。早速、再度の依頼状を出したが、今号には間に合わなかった。次号で紹介するのを楽しみにしている。

伊能忠敬ゆかりの地での不幸なニュースもあった。新年早々の一月三日、兵庫県豊岡市城崎温泉で火災が発生。豊岡市但馬国府・国分寺館に調査依頼しお世話になっている最中の出来事だった。伊能図には「世に曰く城崎」と記されている。温泉街の早々の復興をお祈りします。

(没後二百年記念誌編集担当 河崎倫代)

大河ドラマ化でNHKに陳情

渡辺 一郎

十二月二日、香取市の大河推進協議会の会長（木内志郎さん・会員）、副会長山村増代さん・会員など25名と香取市長 同道でNHKの安斉制作局長、遠藤ドラマ部長に陳情にいらしてききました。私と伊能洋さんにも声がかかったので参加する。陳情団には他に会員の伊能楯雄さん、本郷さん、宮内さんが参加しており、事務局として伊能敏男さん木内信次さんがおりましたから、特別会員の市長もいれると、会員総数十名になります。市長から香取市長、東金市長、横芝光町長、九十九里町長の連名の陳情書を出し、筑波みらい市の



制作局長に要望書を手渡す宇井香取市長と木内会長

市長にも賛成いただいているが時間的に間に合わなかったもので、実際にはもう一人いる、という説明でした。

大河推進協からは、別に伊能ウオーク隊宿泊地の首長さんをお願いして一七五市町長の署名をいただいたものを提出しました。伊能ウオークで本部隊が持ち歩いた英国伊能小図の旗に署名いただいている首長さんにお願したといっていました。が、凄く大変だったと思います。しかし、一七五名の首長さんの署名は重いですよね。成功を期待しています。

香取市長の隣にすわりましたので、聞いたのですが、間宮林蔵の出身地・筑波みらい市の市長に会いにいらして

御協力いただけることになったそうです。今号で特集している間宮の発表記事が効いたようです。

没後二百年記念行事には子孫のトークショウを考えたいと、伊能洋さんに間宮の子孫と対談してほしいといっていました。

高橋さんの子孫は、と聞かれたので、会員にいますよ、ついでにドイツにいるシーボルトの子孫にも声をかけては、と話しておきました。御案内は千葉放送局長（女性）で、千葉県東京事務所からも同席しました。小生から、伊能ウオークの成立経緯、

香取支部だより

伊能忠敬翁顕彰会の発足について

伊能楯雄

昨年十一月二日に香取市佐原において発会式が開催され顕彰会が設立された。

本会は、地元民間人有志が発起人となり設立の準備を進めていたものであり、その趣意書には「伊能忠敬の遺徳と業績を広く世に知らしめるための諸事業を展開し、郷土文化の発展や地域の活性化に努める。」とある。発会式では、規約が承認され、これに基き役員が選任され、会長には、

首長さんが署名されたわけ、英国伊能小図の由来、これまでの伊能顕彰活動について簡単に説明し、伊能ウオーク報告書を渡しました。

また、井上ひさしさんが出した「四千万歩の男の生き方」という本（私も一部協力した）を紹介し、ここにもう一人大河陳情者がおられます。よろしくと、新しい本を渡しました。

写真のように、全員義士の討ち入りのような扮装で、背中に伊能忠敬と書いた半纏を着せられ、桃太郎旗を立てての乗り込みでした。

坂本文夫氏（坂本医院院長）
副会長に、石井良典氏（佐原商工会議所会頭）他3名
そのほか
顧問3名 相談役6名、理事15名
などが選任された。

（伊能忠敬研究会関係では、顧問に伊能洋氏、星登由尚氏 相談役に木内志郎氏、山村増代氏、伊能楯雄が加っている。）

なお、一般会員については後日参加を呼びかけることになる。

事業の主なものとして、研修事業、調査研究事業、会報発行等を実施するほか例年忠敬墓前祭を行う。また中期的には没後200年祭に向けた



NHK陳情団の面々

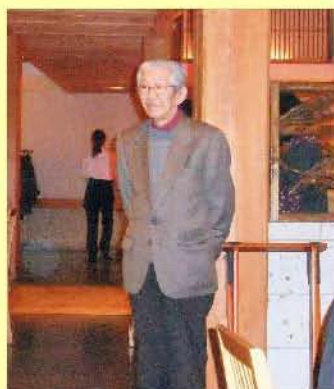
諸事業を行うこととしている。
事務局は、当面、佐原商工会議所内
におかれる。

発会式では、坂本会長の挨拶に続
き、伊能洋顧問から次のような言葉
があった。



挨拶に立つ坂本文夫会長

挨拶に立つ伊能洋顧問



「伊能家に生まれたものとして、地
元佐原の皆様の手で顕彰会が立ちあ
がったことは本当に喜ばしいことと
思っており、この会のために出来る
限りの協力をさせていただくつもり
です。ただ、忠敬についてあまりに
祀り上げてほしくない。」

彼は天才とかではなく、普通の人
等身大の努力の人です。その忠敬さ

んから何を学びとるか、私たちの
問題だと思っています。」

今後の会の運営にあたり、留めて
おいてほしいと思うことです。

発会式のあと懇親会に移り会は大
いにもりあがった。地元経済界の
方々も多く参加され、顕彰会は順調
にスタートした。没後200年は近

(終)

佐原諏訪公園の伊能忠敬銅像清掃

昨年に続き、一月十八日(日)、伊
能忠敬大河ドラマ化推進協議会主催
により銅像及び周辺の清掃がおこな
われた。珍しく暖かい冬の陽のもと、
山村推進協副会長、香取市教育長、
佐原小学校長の挨拶のあと、佐原小学
校生徒二十六名が、高所作業車に乗
り、顔の部分までの高さ八・七メー
トルもある銅像に挑んだ。(伊能権雄)



高所作業車に乗って作業する小学生達



会員便り

忠敬さんも林蔵も歩いた

山道を楽しむ

齊藤 サダ

「伊能忠敬さんも歩いた殿様街道」
のテーマに心惹かれ、十数年来、年
二回春と秋に開催されている「殿様
街道探訪ウォーク」に参加しての感
想文です。

主催する福島町千軒地域活性化
実行委員会には、伊能研究会会員の
中塚徹朗氏も、同会の副実行委員長
として参画し重責を担っておられま
す。又、同氏は、北海道福島町の歴

史研究家でもあります。

松前藩主らの歩いた山道を歩い
て楽しもうとの企画に共鳴し、ほぼ
毎回参加しており、今回は、二十六
年十月二十五日(土)に開催されま
した。当日、ガイドさんやスタッフ
の皆さんは笠や蓑を着けて参加者を
出迎えてくれた。その出で立ちは江
戸時代(つまり忠敬さんの時代を思わ
せる出で立ち)で「これから山道へ分け
入るぞ」の雰囲気を出している。

山人・仙人の衣装の実行委員長の
挨拶に続き、中塚副実行委員長の「殿
様街道を歩いた歴史上の人物」の解
説。何度聞いても耳新しく興味深い。

特に今年は、数日前に札幌から福
島へ来町の打田元輝氏、中塚徹朗氏
と共に訪ねた福島町図書館で目の当
たりにした『吉岡郷土誌』(「草分日
記」により間宮林蔵もこの道を歩い
た確証ありとの臨場感溢れる話題に
心打たれる瞬間でした。

山並みの美しさと、素晴らしい
花々との出会いが山道を登り下りす
る苦勞を物ともせず、前へ前へと進
み歩くエネルギーとなります。

そして山腹を彩るニリンソウやツ
ツジの群落が次々と続きます。泥濘が
酷くともすれば滑落しそうな下りの
坂の両側を埋め尽くす山葵が小さく
白い花を着け真っ白に咲き誇る様子
は壮観です。

秋のウォークは、大きく口をあけた毬栗からこぼれ落ちた美味しそうな栗の実を少々失敬しながら林の間を通り抜け、誇らしげに黄色や赤、そして紅色に色づいた木々の繁りの間

フクジュソウの黄、アズマイチゲの白、カタクリの赤、エゾエンゴサクの紫、



を縫いながらの登り下りで、時には巨大な無数のツキヨダケやボリボリ（ナラタケ？）に遭遇します。又、その年の氣候の具合で、紅葉の季節を終えすっかり葉を落とした木々の間から、かくれキリシタンの歴史を持つ千軒岳などの山々が一望出来、その素晴らしい参加者から歓声が上がります。

樹齢三百年程のブナの巨木に会えるのも大きな魅力の一つです。ブナの根元に立ち、両手を大きく、大きく拡げて、「来たよ、来たよ。今年もまた歩いて此処まで来れたよ。」と話しかけると、ブナの木肌から、物言わぬエネルギーがぐいぐいと伝わって来て、ついつい「次回も必ず来るからね」と心に誓ってしまいます。



殿様街道探訪ウォークのコースは、歴代の松前藩主や榎本武揚、土方歳三らも歩いた道との事。その歩いたとの史実を、種種の文献に拠り精査・確認し、参加者の皆さんへは勿論、

福島町の子供たちにも知って貰い、郷土への誇りと愛着を持つて貰いたいとの思いを強く持ちながら活動が続ける千軒地域活性化実行委員会の思いが詰まったウォークです。

箱館戦争で土方らの進軍を阻止しようとした松前藩が設置した砲台跡での解説、江戸時代にもかしら忠敬さんも立ち寄ったかもしれない茶屋の跡の植物や地形の解説も興味深く聞く事が出来ます。

ウォークの途中、お茶とまんじゅうをご馳走になりながらの小休憩をとり、山道約七・五キロメートルのウォークを終えた後には、地元女性たちの手作りの新蕎麦（一緒に供されるおにぎり・汁・お漬物これらも又見事な美味しい）を頂戴し、松前神楽の舞を

鑑賞をし、行事の総てが終了となります。

登山あり、沢渡りあり、季節の花あり、そして年ごとに違う季節の移り変わりの様子を実感しながら、歴史や土地の食の総てを味わう事のできる殿様街道探訪ウォークのご報告です。

長野県須坂市

北国街道 福島宿在住

市川美津夫

私の地元須坂市が市制施行六十周年になることを記念して、渡辺一郎先生をお招きしての伊能講演会が行われました。

おりしも伊能忠敬公はちようど二百年前の文化十一年に第八次測量の帰途、信州北半分を測量しました。講演会では渡辺先生が、伊能公の生い立ちから測量にいたるまでの話



会場を埋めた約180名の聴衆

をパワーポイントでわかりやすく、
かつためになるように説明して頂き、
公民館の会場を埋めた約180名の
聴衆は真剣に聞き入っていました。
特に伊能測量に際しての桑原隆朝の
働きかけの話は興味深いものでした。
あつという間の2時間でした。参
加者からは充実した時間を持てたこ
とや、改めて伊能公を身近に感じた
等の感想が聞かれました。写真はそ
の講演会風景です。

また、後日測量士協会による小学
生の歩測体験会や、須坂市内の測量
ルートを辿る現地学習会も行われま
した。

施設紹介 情報提供：藤沢市、大沼 晃さん

国土地理院「地図と測量の科学館」

(茨城県つくば市)

3Dめがねをかけて巨大な日本列
島の上を歩くと富士山は膝下だ。ま
るでガリバー。陸地だけでなく近海
の地形が分かるのも特徴だ。

太平洋に向かって怖々足を踏み
出すと、そこは北米プレートの下に
太平洋プレートが沈み込む境界。巨
大地震の原因と巨大エネルギーが生
まれる仕組みを目の当りにできる。
交通：秋葉原駅から、つくばエクス

平成27年度総会の予告

6月27日(土)、富岡八幡宮を予定しています。
議題等の詳細は追ってご連絡します。
多くの会員の参加をお願いします。

年会費納入のお願い

同封の郵便振替用紙での納入にご協力ください。
2014年度まで納入済の方は
2015年度請求額は5,000円です。

2014年度未納の方は、振替用紙に10,000円と
2013、14年度未納の方は16,000円と記入していま
す。なお、16,000円と記入された方は、
今回も納付されませんと会則により自然退会となり
ます。事情がある場合はお申し出ください。

(株)ゆうちょ銀行の払込取扱票を同封していますが、
口座番号：00150-6-0728610
加入者名：伊能忠敬研究会 です。

通信欄のご活用を！！

近況報告などご自由にお書きください。

新入会員の紹介

伊能 洋

この度、川村 優(かわむらまゐ)さん
さんが入会されましたのでご紹介申
しあげます。

長年、千葉県史編纂室長、千葉県

レスで、つくば市駅まで1時間弱、
駅から、バス10分。

営業時間：午前9時半～午後4時半
まで。月曜休館(祝日の場合は火曜日)
料金：無料 電話：029-1864-1872

郷土史研究会連絡協議会会長、千葉
大学講師など歴任された千葉県郷土
史のオーソリティーです。
現在、千葉日報新聞の「近世房総
史ノート」に「伊能忠敬」を連載中
であり、この十月には審書房出版よ
り「新しい伊能忠敬」を上梓され
ばかりです。

今後「伊能忠敬研究」の大きな戦
力としてご期待申し上げる次第です。
伊能家とは母、多嘉子、兄、敬の
時代からの長い付き合いで、親し
くさせていただいております。

『伊能忠敬研究』投稿要領

①原稿の長さ

論文、報告、紹介、などは、本文・写真・図などを含めて一件につき刷り上がり八頁まで、各地のニュース・お知らせなどは刷り上がり一頁以内を原則とします。

*刷り上がり一頁に入る文字数は約 2000 字 (704 字×三行または 480 字×四行) です。長い原稿の場合は連載として分割していただくこともあります。

②原稿のかたち

・本文(テキスト) 原則として、マイクロソフト社のワードなど一般的なワープロソフトで作成された電子ファイルとします。

・写真 一般的な JPEG 形式または TIFF またはフォトショップの PSD 形式でフォーマットされた電子ファイルとし、印刷サイズで 350dpi 程度の解像度のよい鮮明なものを用意してください。

*印刷サイズが 100mm×75mm で 350dpi のカラー写真の場合、1MB 前後のファイルになります。通常のデジタルカメラによって 5M モード以上で撮影された画像ファイルで問題ありませんが、カメラ付き携帯電話で撮影された写真は無理な場合があります。

わからない場合は L 判 (127mm×89mm) 程度にプリントアウトした鮮明な写真でも結構です。

・図 写真に準じます。原図をコピーする場合は、なるべくスキヤナで撮った電子ファイル (JPEG フォーマット) にしてください。カラー数の少ない図は GIF 形式のフォーマットでもかまいません。

③原稿の送り方

左記まで電子メール添付か、CD などのメディアにコピーしたものを郵送してください。その際、挿入する写真・図がある場合はその位置、およびそのサイズを本文中に編集者がわかる形で記入しておくか、概略を記入した割付用紙を添付してください。また、題名、著者連絡先、原稿区分、刷り見込みページ数などを記入したメモ、または原稿整理カードも同時に送付してください。(詳しくは本誌六七号および六八号を参照)

送り先

・電子メール添付の場合 inoken@icloud.com

・郵送の場合 〒153-0042 東京都目黒区青葉台 4-9-6 日本地図センター 2 階

伊能忠敬研究会「伊能忠敬研究」編集部

④注意事項

・編集途中での大幅な追加修正はお受けできません。完成原稿として投稿してください。

・図や写真の引用について、必要な場合は投稿する前に執筆者が責任を持って許可を取っておいてください。

・引用した文献等については本文末尾にリストや注記等で出典を明らかにしてください。

・原稿内容を編集委員会で検討し、不明な点や内容的に不備な点があった場合には執筆者に連絡し、修正または掲載を見送る場合があります。

・受理した原稿は原則として執筆者にお返しいたしませんので、必ずコピーをとっておいてください。

伊能忠敬研究会 御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方にはどなたでも入会できます。

二、つぎのような活動を行っています。

①会報の発行 研究成果・会員活動情報など 原則として年三回発行

②例会・見学会の開催

③忠敬関連イベントの主催または共催

④その他付帯する事業

三、入会方法等 入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄に専門、趣味、入会の動機、御意見などを書き添えて、年会費五千円を左記にお送り下さい。会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度の会報のバックナンバーをお送りします。

四、事務局所在地

〒153-0042

東京都目黒区青葉台 4-9-6

日本地図センター 2F

伊能忠敬研究会

電話・FAX 03-3466-9752

(留守の場合は録音テープに吹込んでください。)

事務局メール inoken@icloud.com

郵便振替口座 00150160728610

伊能忠敬研究会関係ホームページ

○「InoPedia (イノペディア)」伊能忠敬と伊能図の大事典

<http://www.inopedia.jp/>

○「伊能忠敬研究会・資料室」現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図など地図および史料

<http://members.jcom.home.ne.jp/sakamo/>

○「伊能忠敬図書館」忠敬関係の文献、画像資料

<http://www.ttlm.or.jp/~koko>

編集後記 ◇本号が「北海道図と間宮林蔵」特集に決まったとき、果たして原稿が集まるか心配だった。ところが、師走も押し寄せまるころ多くの原稿が舞い込んで、一転、嬉しい悲鳴に変わった。◇会誌は表紙を含めて 64p を超えることはできない。仕方なく、「特集記事を優先させること。減ページできないかなど。」メールでお願いした。◇執筆者のご協力を得て、何とか期日までに編集長に上げることができた。結果としてページ減や次号送irim も多くでた。この場をお借りしてお礼とお詫びを申し上げます。◇今号はいつも増して画像の多い紙面となった。本誌がカラー化したからこそ可能になった特集である。(S・M)

次号(第76号)は2015年6月発行

原稿締切は4月20日の予定です。

皆様からの投稿をお待ちしています！